
観測者

くせもの

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

観測者

【Nコード】

N4806S

【作者名】

くせもの

【あらすじ】

「世界を観測する私が居る限り、世界は私のために存在する」
能力者が織りなす取るに足らない『正義』の物語

序章：崩れ落ちる日常 01

どうでもいい話をしよう。社祝詞やしろのうたという少年は極々、一般的な人間である。

何処にでもいるような両親と、やっぱり何処にでもいるような妹の4人家族で、祖父母とは別れて暮らしている。妹とは仲は悪くないが最近の色気づいてきて化粧なんかも嗜んでいたりして、まあ容姿に関しても秀でているとかそういうわけでもない。何処にでもいる少女と言った感じだったりする。

「…なんだけどなあ」

別に、親と不仲だったわけじゃない。別にトラウマがあったりとか、そういうわけでもない。実は祝詞は拾い子だったんだ！とかそういう素敵な過去もない。妹は母親に良く似ているらしいし、祝詞は父親に似ていると言われる。兄妹でも結構似ていると言われるくらいだし。そういう事実も無い。

「どういふことなんだろうなあ、コレは本当に」

世の中に絶望するほどのことも無い。まあ、なんだ、昔を思い出して死にたくなったり、枕に顔をうずめてのたうちまわる程度は男の子なら誰でもあるだろう。忘れたいこととか恥ずかしい過去とかは14歳を超えた男の子なら一つや二つはあるものだ。

「参ったなあ、参った」

酷い臭いだと思う。これは、その。鉄の臭い、錆びた鉄の臭い、とか色々ないようはある。けれどやっぱり一番手っ取り早い、一番解り易く言ってしまうえば、鼻血を出した時の臭い。——まあ血の匂いなんだけど。

「え、つと。この年だし警察に御用？ 任意同行？ ああ、うん、なんだろうなあ」

テレビが12時丁度を伝えてくれた。ピッピッピッポーン、そういう軽快なノリで。ラーメンあったかなあ、袋の奴。そんなことに意識が向いたのを自覚して、思わずゾツとした。

「……何なんだろうなあ。なんだろうなあ。参ったなあ」

床に転がっているのが、一人、二人、三人。日曜日の家族団欒、白昼に起きた惨劇。そこに帰ってきた長男が遭遇、とかだったら安っぽい悲劇なんだろうけど。残念ながら祝詞は典型的なインドアなわけで、そろそろお昼ご飯かなーなんて考えながらちよつと前に降りてきて、母親はコタツの中でうとうととしていて、いや、別に切れやすい若者ってわけじゃないけれど。まあ、なんだろうなあ。魔がさした。んだと思う。

「え、実はこれがキレるってこと？ まあ笑えないんだけど」

本当のところは覚えていない。とりあえず耳掃除でもしようかなと思って薬箱を取って、そこまでだ。薬箱は父親のそばに落ちているから、凶器はそれなんだろう。妹には文房具だとか爪切りだとかが突き刺さっているし、母親は、まあ居るだろう。父親も妹も足は2本ずつだったし、全部で6本あるし。

「あー、うん。シャワー浴びて着替えよ」

目下のところは現実逃避をすることにした。

シャワーを浴びて汚れを落とし、服に袖を通してドライヤーで頭を乾かそうかな、なんて考えながら脱衣所から出た所で不意に声をかけられた。

「運がいいな、お互いに。いいタイミングじゃねエか、目覚める現場に遭遇するってのはよ」

それは妙な気配のする男だった。年齢は祝詞と同じか少し上くらいだろうが、真っ赤に染め上げられた髪の毛、目つきの悪い男はニヤニヤとした笑みを貼りつけて続ける。アレを見たにしても見られたにしても、相手の反応は奇妙なものに見えた。

「ああ、理解が速そうだな。まあ家族ブツ殺して呑気にシャワー浴びるような奴だし…そんなもんだろ。こんな所で立ち話も何だし、まー逃げちまおうぜ」

着いてこいよ、そう言っただけで彼は背中を向けた。目撃者は消えないといけない、だとかそういう物騒な思考は浮かびはしたが実行に移そうとは思わなかった。勢いで、とはいえ家族を無きものにしたわけ、今さら躊躇するとは思わないのだけど。

「君は誰なのかな、と聞くべきだろうか？」

「その辺は、アレだわ。向こうで話すって感じで。まー何だ？ ようこそ、ワンダーランドへ…ってな」

楽しそうに、愉快そうに笑って彼は正々堂々と玄関から外に出た。今よく考えるとどうやって入ってきたのかよくわからない。流石に

窓ガラスが割れるような音が聞こえれば気がつかないはずはないのだが。

「あー、月並みだけどさ。警察とか呼ばなくていいわけ？ 探偵の推理物とかじゃ無能扱いだけど。日本警察って凄いらしいよ」

「気にすんな、俺は気にしない」

何でもない様に彼は答えた。鼻歌を交えながら、何かを探すように歩く。

「はぁーん、ああ、これだこれ。レンタカーってよ、なんとなく自分の車って認識できねーからこう、その気になってさがさねーとダメだよなア」

軽自動車、目立つ真っ赤な、そしてコンパクトな車だった。後部座席に座ると今度は間延びしたような少女の声が聞こえた。

「お、穂村ちゃんやるじゃん。今度はちゃんと連れてこれたんだ」

「ちゃん付けんなボケ。殺すぞ」

エンジンがかかり、男の、穂村と言っらしい彼の運転でゆつくりと動き始めた。見た目にそぐわない、安全運転派らしい。

「あー、自己紹介した？ ま、私からはまだだからやっとくねえ。
私は甘月明恵^{あまつきみよさえ}、君の先輩に当たるのかな？ 先輩ってえのも妙な話
なんだけどさあ」

隣に座っている少女が、絡みつくように擦りよってくる。甘ったるい声に、背筋にしびれるような感覚が走った。

「…僕は社祝詞、正直、なんでこんなに落ち着いて君らについてきたのかわからないんだけど」

「あー、うん。そういう生き物らしいよ」

彼女の言うことはいまいわからない。そういう生き物、という言い草も。いや、確かにああいうことをして冷静でいる方が可笑しいのだろうか、そうも考える。

「うーん、なんて言えばいいのかなー」

「俺アあれだ、専門家とかじゃねえんだが…、月上機関^{つきがみ きかん}の連中に言わせると俺たちは妖^{あやし}なんだとよ」

突拍子もない話と言えば話だけれど、あの刹那的な衝動はそう断じてくれた方がよっぽどありがたいとも思えた。正常な判断であるはずがない、正常な人間があんなことできるものか。

「あー、そーいやそんなこと言ってたっけ？ 失礼しちゃうと思わない？ 祝詞クン」

「強ち、間違いではないと思うけど」

「ま、そうだろうなあ。こういうことできるのが人間ってえのは、人間に失礼だぜ」

穂村の指先に火がともる。ライターのように、マッチのように。けれどもそれを彼が持っている様子は無いし、隠している様子も無い。それ以上に、自分の中でそれが現実だと証明するかのように何かが囁くのを感じた。

「これが俺の異能だな。俺達のような、まあ月上に言わせる所の妖……これを一応俺は異能と呼ぶことにしている。所謂ところの能力って言うのかね」

「アタシはアタシで持ってるし、君も持ってる。あたし達にはそう

「というのが解る機能がついてるし、君も解ってるはずだよ」

そう言つて、甘月は手を祝詞の首に回した。妙にスキンシップの過剰な少女だ。悪い気はしないが、別にいい気分と言つわけでもない。顔立ちも整っているが他人なわけで、よく知らない人間に近寄られるのは好きな方じゃない。

「うーん、わかんないねー、穂村」

「期待してねーよ、テメーのはそんな繊細でもねーし、つつーかそもそも読み取つても翻訳できねーだろ、ヴァーカ」

どうやら、彼女は接触することで何かしら行動していたようだ。先ほど感じたいやな感じは単に他人に触られていると言っただけではなかったらしい。彼女の手が体から離れた途端に不快感は消えてしまったから。

「『バフバツテリー雷帝』?」

「あ、…ん? あー、君のはそういう系統なのかな?」

「や、チゲーだろ。爪切りを人に突き刺してるような奴だぜ? あれが馬鹿力でそうしたつてのかよ、衝動的に」

「だよねえ。こういう能力なら衝動的にああはならない」

少女は悩むようなしぐさを見せる。そもそも、『バフバツテリ雷帝』だったか？ 何のことかさっぱり分らない。なんとなく口について出てきた言葉でしかない。どこかで聞いたことでもあるのだろうか？

「ふむん、その様子だと穂村には気が付いていないと、んー探知系じゃない、んー、んー。まあアタシがいちいち考えることでもないか」

「そりゃ、なあ。つーか、俺は自己紹介してねえよな？ ほむらあきひさ穂村彰久だ」

「探知系だの、なんだの。いや、さっき火を出したのも、どういうこと？二人で納得している所悪いんだけど」

視線を向けると、甘月は棒付きキャンディを口に入れた所の様で、話すことはないとても主張するように窓に視線を向けていた。離れたりしていなかったが。

「私達が持つ異能、異質な力のことだね。穂村の火を出すアレみたいな、他にも能力者ってーアタシは呼んでるけど、そういう連中が

居てね」

「んで、『バフバッテリー雷帝』ってのは甘月の能力なわけだ。どういふのかは伏せるが、な。一応着いてきたことだし仲間カウントするつもりだが……」

「ちょっとお話しかな？」

空気の質が変わった。大人しそうな、少年の声が割って入る。この車に最初に乗っていたのは祝詞を覗いて2人。そもそも助手席には誰も座っていなかったはずだ。

「あーっと、流石に事故ったら僕も庇えないからね、路肩にでも止めてもらおっかな」

そう、少年が言った次の瞬間には車は車道の隅で停止していた。それ以上に異常なのはこの時点で一切の人通りがないことだろうか。ここは日曜の昼に車も人も通らないなんてことはあり得ない、主要道路のはずだ。

「平和的におはなしがしたいわけなんだよ、僕としてはさ」

「とっとと降りろ祝詞！ コイツは月上の駒だッ！」

甘月に押され、転がるようにして車から叩きだされる。人気のない車道に無様に落ちる。普通なら車にはね飛ばされでもするだろう状況だが、そうはならない。

「酷いね、駒だとか狗だとか。流石に傷つくよ……」

泣きそうに顔を歪めて、少年が車道の真ん中に立っていた。理不尽なワープでも繰り返しているのか、と言いたいほどにその立ち位置は可笑しかった。助手席に座っているのを見て運転席側から飛び出した。それは間違いない。だったらこんなにも早くそこに立っていられるはずがない。

「知るかよ、んで、何のつもりだデメエ？」

「気にしなくてもいいじゃん、穂村ア」

少年が口を開く前に、まばゆい光の様な何か少年の体に殺到した。青白い光がアスファルトをドロドロに溶かし、吹き飛ばす。

「いや、出来たら話し合いで解決したいんだ。えーっと、うん、新しい能力者なんだろ？ 月上の所に来てほしいんだけどな」

と、少年は車の屋根に腰をかけたまま言う。溶けたアスファルトの上には彼の居た痕跡などなく、そして彼の姿にも服装の乱れさえなかった。完全な不意打ちだったはずなのに、彼は冷や汗の一つも流さずに、けれどほんの少しおびえたような表情を甘月に向ける。

「人様を妖呼ばわりするような連中に、誰がついて行くんだっつの」

「それ以上に危険なんだ、解るだろう？ そんな事が出来る人間が、そこらを歩いてたらいけないんだ、だから！」

瞬きをした瞬間とでもいえるのか、一瞬にして甘月と距離を詰めて、蹴り飛ばした。殆ど不意打ちに近い一撃に反応できず、綺麗に足を頭にもらう。

「んの、クツソガキが！ 完全トサカに来た！ ブツ殺す！殺して壊して犯してやる」

「甘月！ マジになるなって……」

「穂村ア！ ソイツ連れて離れてろ！ 殺す！ ゼッテーコイツは殺す！ 殺してから死体をもうイツペン殺してやる！」

困ったように、我儘を言う妹でも見るように穂村は笑みを浮かべて祝詞の腕を掴んで引いた。

「わーったよ、んじゃホテルでな」

序章：崩れ落ちる日常 01（後書き）

登場人物

○社 祝詞

『???』：詳細不明
家族を皆殺しにした能力者

○穂村 彰久

『???』：火を出す能力？
祝詞を連れ出した能力者

○甘月 明恵

バフバツテリ

『雷帝』：詳細不明

甘いものの好きの能力者。

○????

『???』：詳細不明

月上機関の能力者

序章 02

「へえ、二人は見逃してくれるんだあ……」

「3対1より、つてのもあるけど。時間を止めるのも楽じゃないのさ」

時間を止める能力、厄介にもほどがある。そう甘月は考えて溜息を吐いた。次の瞬間には拳が、足が当たってしまっているのだから回避も防御もあったものではない。とはいえ、全てが全てそういうわけでもないらしい。やはり使える上限と言うのはあるのだろう。出し惜しみしている印象が強い。

「どつちにしろ、ブツ殺しは確定だけどねえッ！」

青白い光の奔流が少年を襲う。アスファルトを溶かし、砕き、車を吹き飛ばした。しかしそれでも少年は容易にそれを避けた。

「そんなに無駄使いしてもいいのかな？」

しかし、電気の性質は流れやすい方向に流れるというもの。それが根本的な事実であり理屈である。アスファルトよりも大気中の水分に引かれる。そして、有機物である人体にも距離や規模によって

は引かれる。

「時間停止、つてーほどの規模でもないくせに！ 傑作だなあッ！」

だからこそ、彼女は気がついた。生体電流さえ相手に触れていれば読み取ることができるとに敏感な彼女の感覚と能力が、歪さに気がついた。時間を止めて回避しているなら、彼が纏ってしまった微弱な電気が尾を引くことはない。

「何をッ……」

更に、落ち着いて観察すれば時間停止を用いた回避の瞬間に彼の体が沈むのを感じた。辺りに飛び交う電波がそれを伝えてくれる。相手は能力行使の前から行動を起こしているのだと。もちろん、時間停止が極限まで短い時間に行われているのなら回避のための行動だろうが、彼は走行中の車に乗り込む事が出来る程度の能力の規模を保有している。少なくとも停止したままで回避出来る程度には行使出来るはずだとみている。

「んー、あー！ ガス欠かよッ」

「……これ以上は僕も容量不足か、車吹っ飛ばされたせいで人払いも……今日の所はお暇するよ、命の取り合いはしたくないしね」

「逃がすわけねえだろおオ！ ブツ殺すつつたろーが！」

高圧電流を束ね、一気に放出する。当然それはたやすく避けられ
たが、それは本命ではない。目的は、電柱を引き倒す事。

「あ、あんまり派手にやられると面倒なんだけどなあ」

電柱は線を引きちぎり、道路に倒れ込む。建物に突っ込まなかつ
たことを幸運だと思うべきか。

「アタシを怒らせた代償さ。アタシは安い女じゃないからね」

千切れた電線を掴む。膨大な電力が体を駆け巡るのを感じる。コ
ンセントからチマチマと電気を回収する面倒さが解る。ほぼ一瞬で
容量限界まで電気が溜まった。こういう派手なことは流石にそうそ
うできるものではないから。或る意味では月上に感謝しないといけ
ないだろう。

「電気を操るとは聞いているけど……」

「ハッ、隠すほどでもねーよなあ！ 『バフバッテリー雷帝』は電気を蓄積出来る
のさ。まー、こうやって補充しねーと使えねーけど」

だが、決定的に違うのは普通能力者のように力を使いきって戦えないと言う展開はこの現代日本ではあり得ない。張り巡らされた電気の、科学の力に祝福された能力。それが彼女の『バフホッテリー雷帝』

「だが、お前を殺すにや十分だっつーの！」

電気を少年に向けて走らせる。確かに、協力で便利な能力だがその実のところは単純だ。溜めこんだ電気は放出にしか使えないし、精密な操作は願えない。どうしたって単調になる。その上今回は電線を引きちぎっている。いかに月上の人払いの術、所謂ところの陰陽道の力が強力であろうと、ライフラインの異常を何処までごまかせるのか。

「追跡は諦める、逃げの余力は残す、これは今のままではギリ貧かな」

それを理解しているからこそ、少年——千染白雪は落着いていた。事が露見して困るのはお互い様。故に逃げに回れば深追いはできない。甘月の側は人払いの技術はないから、攻めるも守るも断然有利。能力の余力に関してもまだ残っている。出来れば無力化してしまいたい。

「流石に横着してたらダメだろうなア！おい！」

そもその身体能力が違うのだと、白雪は完全に失念していた。元々、喧嘩の一つもして来なかった気弱な性格で、こうやって能力を得て類稀なる力を手に入れてさえ、生来の感覚を捨てることのできない曖昧さに、これ程まで後悔したことはなかった。瞬間的に懷に飛び込まれ、華奢な腕から拳を腹部に叩き込まれる瞬間まで甘月をとらえることができなかった。

「ぐっ、が、ふっ…！」

普通なら内臓の一つでも風船のようにはじけ飛んで口から飛び出しそうな、それ以前に腹をぶち抜いて貫通するかもしれない、そんな一撃を貰って宙を舞う。殆ど本能的に能力を行使できたおかげで戦闘は継続できそうだ。これだけは運命共同体の様な連中に感謝してもいい。が、

「ん、ふーん。能力を行使した、のに直撃？」

能力の手の内を知られるのは困る。ヒントを与えるのさえ嫌だ。白雪は憶病な男だ。病的なまでに憶病な内面を見せないように取り繕ってはいるが。敵を倒せないくらい憶病なくせに、誰かが傷つくのが怖くて、自分が傷つくのも怖くて。

「くっそ、わ、悪く思わないでくれよ！」

バレてしまうのは怖い、手の内を知られるのが怖い。けれど負けてしまうのは嫌だ。それだけは避けられないといけない。故に、手の内を明かしてでも全力を出す。白雪の能力『ジャストドラスビート時間停滞』。それは速度を操作する能力。極限まで遅くした時間の中を、最速の自分が駆け抜けることであたかも時間を止めたように行使する能力。

「うぉぁ！」

速度はそのまま威力に直結する。当然だ。だから自動車や電車の人身事故は悲惨なのだ。時間を遅くする必要がない分、能力に余裕が出た。

「一気に、押し込むっ」

加速して突っ込む。意識を狩り取ればいいだけだ。後は中継役の機関の人に任せればいい。不用意に傷つけたりはしない、ふらふらと歩いているよりは、その方が彼女だっていいはずなんだ。そう言い聞かせて。

「何度も言わせんなッ。テメーはブツ殺すつつたろうが！」

青白い光が、視界いっぱいに広がった。その場で崩れ落ちるよう

に、前に進もうとした勢いそのまま無様に倒れた。完全に電気が体の中を駆け抜けて言ってしまったのか、思うように体が動かない。

「あふっ……」

加速させても加速させても、痺れが抜ける気配がない。これは拙い。普通なら致死レベルで流れてしまっている。速度を断続的に遅くしても正直間に合うかどうかかわからない。

「手間取らせてくれたなア、つたくよお……」

「やー、ごめんごめん。とりあえず、撤収させてもらっわ」

一旦警戒を解いていた甘月は、突然聞こえた3人目の声に辺りを見回す。しかし、誰の姿も映らない。それは異常な光景なのだけだ。

「ま、一応はお仲間だし。河原も泣きそうだからね。回収させてもらっのさ、喧嘩は次の機会にしよう」

ずるり、と。何かが地面を這うような音が聞こえた。白雪の影が不気味に揺れて、まるで水面に沈むように、彼の姿が沈む。茫然とそれを見ていることしかできなかった甘月は、相手の気配が影も形

もなくなってしまったことに気がついてから大きくため息をついた。

「不完全燃焼だっつーの……」

「どうだった？」

「見てたんですか？ 趣味が悪いですね……」

やっと痺れが抜けて立ち上がることができた白雪に、女性は微笑みながら問う。そんな彼女を非難するような目を向けた。

「ここいらは私の担当じゃん？ 勝手なことをしたのは君じゃないか」

「氷室さんがやると取り返しがつかなくなりますから」

此処は彼女の、と言うよりも月上機関が用意した隠れ家の一つ、いや、隠れる必要も無いので拠点の一つとでもいえばいいのだろうか。影から吐き出されたと思ったところにおいて、本当にこの人の能力は反則だと思い知らされた。

「ま、良しさ。新しい能力者の覚醒に当たるのは殆ど運ゲーだからね。接触できただけでも良しとするさ」

と、氷室要^{ひむろかなめ}は快活に笑った。生粋^{バトルジャンキー}の戦闘狂で、自分とは違う純粋な能力者。白雪は彼女をどうしても好きになれなかった。誰かを傷つけることを肯定するどころか楽しむだなんて、スポーツでも何でもないのに、理解できない。

「ま、今日の所は新しい遊び相手の誕生を祝して、見逃してあげるさ」

憶病な白雪には、自分の薄っぺらな正義を彼女にぶつける勇氣なんて、ありはしないけれど。

序章 02（後書き）

登場人物

○甘月 明恵

バフハッテリー

『雷帝』：電気を蓄積し、放出する能力。
能力者、千染白雪と交戦し勝利する

○千染 白雪

ジャストダグズビード

『時間停滞』：速度を操る能力
能力者、甘月明恵と交戦し敗北

○氷室 要

『???』：詳細不明

千染白雪を回収。戦闘狂

第一話：説明とこれからと 01

「ま、座れや」

ホテルの一室に傾いた日差しが差し込む。安っぽいビジネスホテルの2人部屋はすこし狭く感じた。その感覚が目の中の彼、穂村が持つ空気のせいなのか、それとも着かれているからなのかは解らない。

「んーまー、甘月の奴が戻ってくるまでに適当に説明するか。一から十まで説明ってエのがわかんねエンだよな」

「月上機関、というのは？」

それもそうか、と一人納得する。何から話せばいいか難しい、と言うのも理解できる。何か例をあげるとは難しいけど、とりあえずは此方から色々聞いた方がよさそうだ。

「ああ、月上機関は陰陽道、陰陽術とかはしってるよな？ まあその前提で話すが、そういう術を扱ってきた一族のこつた。月上本家を筆頭とした、つきみや みつめつき月宮、にいつき満月、つきしろ新月、つきはみ月面、つくよみ月蝕、月詠の分家によって構成されてるところだな」

「なんと言つかまア、出来そこないのラノベみたいなお話で」

一瞬、呆けたような表情を見せた後で、穂村は楽しそうに笑った。確かに、フィクションだったらいいなア、などと呟いた後、特に断ることも無くテレビをつけた。何のことも無い旅番組のようだった。

「まあな、そう言われてみればそうかもしんねエ。それで、その月上機関は現代にいたるまで、妖——いわゆる妖怪って奴と戦ってたわけだ。まあこれは聞き出した話だから俺が見たとかそういうことじゃねエンだが」

陰陽道なんかの歴史は知らないが、平安時代などでは貴族達はそのういった占いだとかを重く考えていたことは知識として知っている。妖怪なんかが実際に存在していた、のだろうか。先ほどというべきか、走行中の車に乗り込んできた彼だとかを思い出してみると、完全に否定するのもはばかられる。悪魔の証明、という奴で。

「それで、俺とかお前みたいな能力者、これを妖として討伐しようとしてるのが月上機関ってことになるな」

と、するとさっき襲いかかってきた彼は能力者ではないのだろうか。それとも能力者なのに協力している、のだろうか。はたまた、ファンタジーよろしく人工的に作り出した能力者だとも言っただ

ろうか。

「じゃあ、彼は？」

「白雪か、千染白雪。月上機関に協力して身柄を保護してもらって
るって立場だな。能力者は能力者を感知することができるし、そう
でない奴らに能力者を、少なくとも正面から倒すことはできないか
らな」

よくよく考えれば、何の後ろ盾も無く経済的にも問題だらけどこ
ろか、一家皆殺してどうにかなると思う方が問題なんだろう。どち
らにしろ、これから頭が痛くなる思いだ。とはいえ、此处まで連
れてきた彼らに考えがあるのかもしれないが。

「んで、他にも能力者関係の組織があるんだ。先ずは能力開発機構、
月上と真っ向から敵対中でな、能力者について調べているらしい。
接触が何度かあった。あとは、とりあえず所属していない俺達の様
な能力者。徒党を組んでる場合もあるな」

そういえば、彼らは何故こうやって接触を図ってきたのだろうか。
仲間に引き込むためだろうか。いや、それ以上にタイミングが良す
ぎる。彼らも、そして月上機関の能力者も。偶然という一言でかた
ずけるにはあまりにも出来過ぎている。

「どうやって僕の所に？ ホテルに泊まってるってことはここいらが拠点とかそういうわけじゃないんでしょう？」

「そうだな、月上から今のところは逃げているってエ感じかね。お前を見つけたのは半分偶然で、もう半分は情報があったからだな」

「情報？」

「そうだ。月上は陰陽道やら、まあ古い日本の……そういう技術を守ってきたからな。占いだか掛だっけ？ ああいうのでアタリを付けてるらしい。あとはアイツ等を追いかければ新しい能力者にうまくいけば接触できるってわけよ」

鵜呑みにしない方が良さだろうな、と祝詞は考えた。別に相手が嘘をついているとは思わないけれど、正直に一から十まで教えてくれるとは思わない。相手の方がはじめから優位に立っているのだから、情報の取捨選択はすべて彼にゆだねられている。

「貴方達の目的は、何でしょう」

身の振り方は重要だ。曖昧で危険な立ち位置に居る。少なくとも無知なままにいるよりは教えてくれる以上は出来る限りひきだしたい。

「普通に生きること、かねエ。ああ、まあ月上に世話になるのが多分一番賢いやり方なんじゃねエかなあ、とは思う。権力もあるし、それなりの安全も保障されるだろうよ。だが、いつまでだ？」

「……」

「いつまで安全を保障してくれる？　アイツ等は俺達を妖として処理しようとしてるんだろ？　能力開発機構も、あれは研究機関だからな、どうなるか解ったもんじゃない」

確かにそれはその通りかもしれない。とはいえ、月上の人間や能力者達に直接話を聞いてみないことには解らない。

「俺はあいつらを信用しない。殴られたから殴り、殴ったから殴れる。誰かが止めなきゃあ争いは止まらない、つってな。それでも殴るのをやめたらナメられるかやられるか、だしな」

傑作だ、と穂村は笑った。つまらなそうに、ベッドに体を沈めて。

「お前はまあ、好きにすりゃいいよ。月上に行くならそれでいいし、機構に行くなら止めやしないさ。甘月は知らんけど、俺は止めないし邪魔しねエよ」

欠伸を噛み殺して、テレビに視線を向ける、とりとめも無い、日常の残滓が煌々と映し出されているディスプレイをつまらなそうに眺めて、鼻で笑う。

「貸し一つ、ツつとくかね。絶対返さなきゃいけないもんでもないし、貸しとも思ってたねエけど。喜劇だぜ、^{ファルス}悲劇だぜ、^{ファルス}茶番だぜ」

「月上とか、機構とか、どうやって……」

如何すればいいかわからない。それが本音だった。言葉の通りに気にすることなく月上機関を頼ってみるのも選択肢なのだろう、が、一度、敵対したとみなされてしまったのならそれは無理な話になってしまう。

「月上機関はまあ、王道の京都が本拠だな。月上本家があるし、分家筋はわりとそこいらに散ってる、とは聞いているが。能力開発機構は知らん。いろんな所にあるのかも知れんし一か所だけかもしれない。そこは月上が詳しいんだろうよ」

そもそも、何故彼はここまで詳しいのだろうか。そんなものがインターネットに転がっているハズはないし、誰かから聞きだしたのか、それとも最初はそのに所属していたことでもあるんだろうか。

「京都、か」

「足をどうするか、だがね。どっちにしろ明日まで考えりゃいいさ。向こうが接触してくるのを待ったっていい」

自分の能力、とやらの気がつくこと。先ずはそれが一番大事なのだろう。身の振り方も、立ち位置も、それから考えるべきだろうか。

「能力ってのは？」

「難しい質問だな、こう、定義のようなものはないな」

悩むように唸り、彼は指先に火を灯した。

「こういうの、としか言いようがない。遭遇した能力者には影を操る奴が居たな、あとは何でも掴む能力の奴もいた、こいつは殺したけどな」

「使い方、と言うのは」

「それも難しいな、どうやって歩いてるのかとか、呼吸してるのかとか、そういう説明をするのが難しいのと似ている。ただ、お前は

甘月の能力名を言い当ててるんだよなあ」

そう、だった。いや、そもそも能力名の厨二っぽさはどうなんだろう。自分で付けているのだろうか、とも思うがそういうタイプでもなさそうだが。そういえば彼の能力はどういうものなんだろう。そう思っで見つめる。

「『ダブル・スタンダード燃える空気』、ですか」

うつすらと、文字が見えた。注意してみれば周りのモノにも、だ。電子時計、だとか。目を凝らして、その文字を見ようと意識するとやっと見える程度だが。

「正解だが、なんでわかった？」

「見える、と言っのでしょかね」

文字が見える類の能力、だろうか。違う、と体の中で誰かが囁く。こんなものじゃないと。この程度では終わらないのだと。とはいえ、恐らくはまだその時ではないのだろう。文字があまりにも希薄で、あやふやで、とらえようがない。

「は、ん。っと、甘月が戻ってきたみたいだぜ？」

バチツ、と何かがはじけるような音がして、扉が開いた。カード
キー対応のオートロックだからって、無茶をする。

第一話：説明とこれからと 01（後書き）

登場人物

○社 祝詞

『???』：文字が見える能力？

説明を受けて、能力が目覚めかける

○穂村 彰久

『燃える空気』：火に関係する能力？

割と面倒見が良い能力者

第一話 02

「ん、お話は終わったのかい」

「ま、大方な。コイツの能力も取っ掛かりは見えてきたし」

「はーん、それは良かった。まーまー、焦らず行こうか」

甘月は倒れるようにベッドに突っ込んだ。中に仕込まれたバネが軋む。大きく溜息を吐くと彼女は枕を抱きかかえた。

「いいところだったんだけど、回収されちった。ありゃー氷室要だろうね。影使いの」
ひむろかなめ

「氷室が来てんのか、あんの戦闘狂……バトルジャンキーまあ手え出してこなかったってえこたあ、今のところは大丈夫だろ」

「それよりも月上から二人も同じ場所に派遣されてるのが可笑しいだろ。アタシら追いかけてきた感じでもねーのに。ありえねーっつかよ」

カチカチと甘月はチャンネルを回す。ニュースだとか、くだらない旅番組だとかそういったものが今の時間はメインらしい。退屈そうに彼女は溜息を吐いてベッドに顔をうずめた。

「ベッド二つつきやないからよー、一緒に寝ようぜ穂村ちゃん」

「死ね」

「まさか男同士で寝たいとか!？」

「首括って死ね」

ケタケタと笑う甘月はモゾモゾとベッドの端に寄ってあいているスペースを叩いた。典型的なビジネスホテルの寝具は、どうにか二人で眠れそうではある。

「ああ、社は他人だもんなア。まあ、なア。しゃアねえのかなア」

「うれしー癖に」

「くたばれ」

「アタシは嬉しーよ?」

こてん、と首を傾げる。黙って笑っていれば愛らしく映るが、性格と性根は腐りきって発酵しているような女だ。騙されてはいけない。ぼんやりとテレビを見つめると、最近デビューしたらしい少女歌手が歌を披露しているところだった。悲しげな旋律と可愛い声がか妙に合っている。たしか結構人気があると聞いたことがある。

「とりあえず、だ。ケー番交換しとくか? つつーかお前もケータイ使えんくなるか」

「それ以上に警察にお世話になりそうですが」

それが一番のネック。家族3人の死体と行方不明になった最後の一人。だものな。突き刺さっている物品からは指紋だって出るんだろつし。本当に参る。彼は気にするな、だとか何とか言って居た気

がするけれど。

「無いよ、それは無い。月上の方でなんかするんだってさ。異形は秘匿されねばならない」

「まア、そういうことだ。俺にしたって、家燃やして此処に居るんだわ。でも何も無い」

大袈裟に肩をすくめて、穂村は続けた。

「俺の家が燃えたのはニュースにならなかった。まアこんなことアどうだっていい。そんなこともあらアね」

ポケットから煙草を出し、指先の火で灯す。近くにあつた机ごと灰皿を手繰り寄せて灰を落とす。

「問題は俺が居なくなつたことに誰も気がついてないこと、かね？ いや、どうなんだろうな。なんて言うのかね。俺は説明が下手なんだよな、そこで実は煙草は苦手なんだよなア」

はふ、と短く煙を吐いて、困つたように笑う。

「そう、俺は居無かつたことになっている。これが一番正しいのかね。戸籍も何も、つつーのかね。ダチとかもいたし、バイトもやってたのに、な。俺は死んだことになってるのかも知れねエし、そうじゃねエのかもしれないエ。あれから連絡とってねエからなア」

ガリガリと頭をかいで、細くため息を吐く。眩しそうに目を細めた後、立ちあがってカーテンに手をかけた。

「アレだよねー、突飛だよねー」

「否定は、その、しないけど」

「気が付いたらさー、ブツ殺しちゃってさー、貴方は化け物です、死ね！　っはー、だったらトラックに引かれてテンプレとかのが楽しいっつーの」

例え話さ、と甘月は笑う。テレビでは歌が終わって、少女が司会者の質問に答えているところだった。昨日と、今日では、こんなにも違うのか。そんな風にぼんやり考えて、体をベッドに沈めた。

「やってられねー」

正直な感想だった。

夜の帳が下りる。

誘蛾灯の悲鳴を聞きながら、明滅する街灯の下で薄っぺらな笑みを浮かべた。

「全く少年、手間をかける。んま、お陰で新しい同朋の誕生に立ち会えたんだけど」

「あつりえねえ……」

息を切らし、男は呟いた。慢心した覚えは無い。自身の能力を見誤ったつもりも無い。

『神は賽を振る』は何処までも融通のきかない、しかし強力な能力だ。2つのダイスを振って行動の可否を強引に決定する能力。しかも振り直しを無制限に認められている。そして今も、この目の前の女に勝つ事は決まっているはずだ。

「どういうこつたよ、マジ解らねー！クソが」

「くつは、それで終わりかい？ んふふ、不完全燃焼だよ。これじゃ喧嘩じゃなくてイジメじゃないかい？ んま、それはそれで嫌じゃないけどね」

ダイスの結果は絶対成功、だから勝てなくてはいけない。勝てなければならぬ。いくつかの例外や穴はあるが、どう考えてもその可能性は薄い。第三者から攻撃を受けていれば少なくとも解るはずだから、だ。

「さて、行くといい私の従者。その首柄を取ってこい」

影が伸びる。回避判定を一々振っている暇は無い。この身を貫かんとする陰から飛び退くように逃げる。能力の継続時間の終わりもそろそろ見えてくる。能力が生きていてこの有様だ。

「かつ、ぐ、……ん、の……！」

縦横無尽に駆け巡る真っ黒な影が体をひきさく。電柱に寄りかかり、必死に頭を回す。判定をやり直すか、逃げるために。とはいえ別の判定をするには今の判定が消えるのを待たなければならない。

回避判定のような小目標ならまだ可能性はあるだろうが。さつきから能力を働かせても手の中にダイスは現れてくれない。

「言い残すことはあるかい？ んふふ、んま、興味は無いけど。んじゃま、バイバイさ」

手を振りおろす。それと同時に、影が少年を叩きつぶした。二度、三度と振り下ろす。能力者はそう簡単に死にはしないし、治療系の能力者が居ないとも限らない。調べ上げた経歴を考えると、背後に他の能力者が居るとは思わないが。

「おっけーおっけー、私の従者。良くやったよ、なでなでしちやる」

カラのペットボトルを開ける。辺りに飛び散った血液や壁に染み付いた血液が吸い込まれるようにペットボトルの中に飛び込む。

「こんなもんか。あつとは月上にお任せでいいや」

「ひーちゃんおっかれ」

誰もいない場所に声が聞こえる。氷室は振りかえることも無く、声の主を探そうともせず笑う。

「おっかれー。んま、2対1でやってたらそりゃ勝つよねっていう」

「は、ん。種も仕掛けも解ってる相手に正面からってのはな。喧嘩はよーいドンじゃないって偉い人も言ってる」

違いは無いね、そう笑って彼女は影に沈んでいった。

第一話 02（後書き）

○甘月 明恵

『パワー・バッテリー
雷帝』

○穂村 彰久

『ダブル・スタンダード
燃える空気』

○社 祝詞

『???』

三人そろってお話し中

○氷室 要

『???』：影を操る能力？

○黒城 白黒

『くろしろ ものくろ
ダイスロール』

『神は賽を振る』：ダイスで判定する能力
名前さえ出ずに脱落。未所属の能力者

第一話 03

「貴方の力、貴方だけの力、貴方の現実、貴方の観測世界」

ふわり、と少女は微笑んだ。どこか得意げに、意味深に。

「貴方の世界は、視る価値があるのかしら。視るに堪えるのかしらね」

前髪を弄んで、少女は続ける。

「貴方の異常、貴方の非日常、貴方の幻想。名前をあげないといけないわね。ううん、名前は決まっているのだけど」

くるり、と回る。お伽噺のワンシーンのように、スカートが舞った。

「『プリフィクス・エンチャンター』
『名付け親』」

くすり、と笑う表情はあまりにもにあっている気がして。

「さてと、干渉は此処までね。ふふ、些末なことね、きっと粗末な手法だと言われるんだけど。云われなき中傷よね。どうでもいいのだけれど」

酷く、眠い。

「おい、起きろっつの。もオすぐだぜ」

寝起きの目に飛び込んできたのは、目つきの悪い少年の顔だった。不機嫌そうに見えるのは目つきのせいだ、多分何とも思っていないだろう。あつてそれほどたつてはいないが、その程度のことは解る。

「ん、あー、おはようかな？」

窓の景色が後方に飛び去っていく。なんだったか、寝起きの思考はどうにも二手三手遅れてしまう。……ああ、そうだった。確か、穂村達の仲間が居る所に戻るだの何だの言うことで着いていくことにしたんだった。

「次、降りるよ。迎えは出せないってさー。バスで近くまで行って歩きか車借りていくかどっちする？」

「都合いいのありや借りる。無けりゃバスで」

アナウンスが聞こえた。遠くに来たという実感は無いが、どうにもいつもと違う街並みに、戸惑いを覚える。眠い目をこすって、大きく欠伸をした。

駅から出ると、空は灰色に濁った雲で覆われて、今にも泣きだしそうになっていた。平日の昼過ぎではあったものの、それでも駅前

にぎわっている。ふと、今の自分がどう見えるか考えて、やはり辞めておいた。ろくな光景じゃない。

「これは、皆様お待ちしておりました」

出迎えたのは胡散臭い笑みを浮かべる長身痩躯の男性だった。顔のつくりを見るに、どうも日本人らしくない。彼の手には金属製の手提げかばんが握られている。

「……ルーティアか」

「おや、はじめましての方がいらっしやいましたね。私はこういうものです」

流暢な日本語とともに、名刺を差し出された。特に二人が何か動くような気配は無いので、受け取っても大丈夫なのだろう。

「能力開発機構の、ルーティア・キニーですか」

「ええ、皆さんの支援をさせてもらっています。個人的なものですから限界はありますがね」

鞆を開けて、そこから携帯電話を取り出して投げ渡した。黒の、丈夫さと耐水性に定評がある機種だった。

「私の番号とアドレス、あとはお仲間の連絡先を登録してあります。後はご自由に。一応定額制で電話料金等も気にしないで結構です。そしてこちらが資金になりますね」

そう言って差し出してきたのはキャッシュカードだった。

「暗証番号はその携帯電話の下4ケタに設定してあります、中身は
ご自由に」

くつくつ、と喉を鳴らすように笑って、彼は踵を返した。

「また逢う日まで、息災で」

「ふむ、新しい能力者とは接触できたと」

「ういいうい、そんで報告にあつた能力者は始末しといたから」

「ああ、確認したわ。黒城白黒、結構厄介な能力者らしいけど、良
く勝てたなあ」

畳敷きの一室で着物の女性が一人喋る。机の上に無造作に置かれ
ている紙切れを指でなぞり、欠伸を噛み殺した。

「せやけど、働き者やな。要さんは」

「趣味の延長だからね」

「ま、上手くやってくれたようやったらなんでもええねんけどな。
白雪さんはアレや。押しが弱いな、にしても。接触できたんやから
それ以上言えへんけど」

紙切れからは氷室の声が聞こえる。通信用の札で所謂ところの符術の一種だ。通信機器が発達した今となつては正直なところ携帯電話の方が多機能で便利だ。それでも圏外がないと言う意味で、本来の機能としては勝っているのかもしれないが。

「そつちの様子はどう？」

「相も変わらず、や。河原ちゃんが働いてくれたらいつちゃん楽なんやけど、あの子はやさしーからなあ」

「アレは甘いんだよ。だいたい、連れてきてほしいなら私でもいい」
「黒城の能力はいらん」

すっかり冷めたお茶を口に含み、庭を見つめた。丁寧に整備されていることが解る広々とした、らしい日本庭園と言う奴だ。正直なところ見あきた光景ではある。

「赫夜様、月蝕から報告は上がっております」

「あ、ほたらまた連絡してきてな。……矢面、入ってええよ」

「失礼します」

静かに、音も無くふすまが開き、紙束を抱えた男が部屋に入ってきた。机の上にそつと紙束を置く。月面矢面、月面家当主にして月上赫夜の従者でもある。

「満月、新月の報告も纏めてあります」

「やたら多いな、これホンマに必要なん？」

「はい、赫夜様の時間を割いていただく価値のあるものだけを纏めてありますので」

「そ、やったらしゃーないな」

積み上げられた紙束からとりあえず一枚取り上げて目を通す。新しい能力者が戦力として加入する、か。それも能力開発機構から流れてきたと。あちらの管理が杜撰なのか、それとも何かの思惑があるのか。

「この白百合音色しゆいしやうつての、音擦博士おとすれの関係者なん？ 裏付け取れるん？」

「不明の報告ではそうではないか、このことです。裏付けに関しては何分、戸籍が消失しておりますので血縁をたどるうにも」

「そか、調べといてや」

紙面上には白百合音色の名付け親が音擦博士だと、癖のある字で書きこまれている。頭の出来は悪くないはずだが何時まで経つても暗号文を覚えようとしないから困る。何が名前に音が入ってるからきつと関係者だろう、だ。

「問題は、あの一味、か。矢面、足取りはつかめ取るんか？」

「はい、ですが近いのは氷室か白雪。氷室はすでに別件を指示しておりますし、白雪はしばらく動けないでしょう。彼では3人相手は

「どう考えても厳しいですし」

「それゆーたらこっちの戦力で当たれへんよ、月宮の何人かを出しとき。監視と偵察を厳命や」

「そのように」

楽しいなあ。そう言っただけで彼女は衣の擦れる音とともに退出する矢面の背中を見つめた。そして視線を再び紙の山に向けて、煙管を啜えた。

第一話 03（後書き）

○社 祝詞

ブリックス・エンチャンター

『名付け親』：？？？

○穂村 彰久

ダブルスタンダード

『燃える空気』：炎に関係する能力？

○甘月 明恵

パワー・バツテリ

『雷帝』：電気を放出する能力

○ルーティア・キニー

『？？？』

能力開発機構所属

○月上 赫夜

『？？？』

月上家当主

○月面 矢面

『？？？』

月面家当主

○白百合 音色

『？？？』

元能力開発機構、現月上機関所属

第二話：エンカウト01

「あっあー、俺です」

「やあ、君が一番近いもんで連絡させてもらったよ」

電話越しの女性の声は、やけに上機嫌のように思えた。欠伸を噛み殺して彼は大きく伸びをすると、ペットボトルに口を付けた。

「何の用っすか、博士」

「なに、君の近くに新しい能力者が来ているもんでね。それを教えておこうかと」

空のペットボトルを投げる。道端に転がったそれを気に留めることも無く、歩を勧める。人通りはまばらだ。

「はあん、それで？」

「それだけさ、能力者が近くに居ることは察知できるんだ。探して引きこむなりぶち殺すなり、出食わさないように気をつければ良い」

電話の向こうで愉快そうに笑う不愉快な面を思い出して、彼は不機嫌そうに顔を歪めた。また取るに足らないデータ収集ってのが目的なのだろう。

「御忠告痛みいるね」

「なに、君も大事な大事な資料だからね。勝手に死なれては困る。」

そうでなくても月上の連中は好き勝手に殺して回ってるんだ」

コーヒーを啜る音が聞こえた。それに混じって紙の擦れる音も。

「あとは、月宮やら月蝕には気をつけたまえよ。たかが人間だがさ
れど人間だ。それでは、私も多忙の身でね。失礼するよ」

こちらの返答も待たずに通話が途絶えた。相も変わらず自分勝手な奴だ。そうは思うが言葉にする気も無い。向こうはどうせ気にしないだろうが細かいことを気にする同僚は少なくないし、何処で聞き耳を立てているか解ったものではないし。

「はん、面白くねエ」

「物資の搬入の方は終わった？」

「は、指示どおりに。しかし良いのですか？」

黒い服の少女に、何処にでもいそうな眼鏡の青年が問いかける。

少女は不機嫌そうに手渡された銃器を手で遊ばせた。

「いいんだよ、監視を厳命されたのは月宮の貴方達だけ。私達、月蝕は何も命令されてないんだから」

「それは屁理屈というものでは？」

次に声をあげたのはバンダナを巻いた女性。彼女は大きなケースを少女に押し付けるように渡す。

「それも理屈だし、これは？」

「代理演算システム、という奴ですね。狙撃手個人での狙撃が可能ないように観測手の代わりをしてくれます」

少女の問いかけに答えたのは眼鏡の青年。この二人の男女は月上機関の退魔士、月宮家の構成員である。だが、少女が名前も知らない所を考えると実力の無い後方支援くらいしかできない連中なのだろう。そんなだから監視なんぞを厳命されるんだ。

「そう、まあいいけど」

月蝕未明つきはみ みめいは思考しない。少なくとも仕事においては。敵を撃つ間だけは弾丸でいれば良い。一切合財の思惑を無視して、愚直に化物を撃ち殺す弾丸になる。だからこそ、命令など知ったことではない。能力者は化け物だ、だから殺す。

「……」

それにしても、お嬢様の考えることは解らない。能力者、と呼ばれる異物を飼い始めたのも、そしてお嬢様から感じるようになった妙な気配も。最近は屋敷に戻ってもその妙な気配を感じてしまう。結界で守られたあそこに妙なものが混ざるはずはないし、裾払いも何もかも試してはいる。

「ふう……」

人生経験は濃いが短い彼女だが、そうやって訴えかけてくる自分の声は今まで何一つ間違ったことを言っていない。だからこそ、今回の騒動には細心の注意を払っている。

「全く、面白くないね」

「ルーティアはさ」

「はいはい」

後部座席で横になっていた少女の声に答える。運転中に声をかけられるのは好きではないが、会話自体は嫌いじゃない。

「別に私は興味がないからいいんだけど、ああいうのいいの？」

彼女の問いに答える必要はないと言えない。そもそも良く考えれば全てを誰かに話したことは無かった。それなら、まあ彼女くらいになら教えておくのも一つの手段かもしれない。

「いいですよ、進化を促すためには必要なことでしょうし」

「進化ア？ B キャンセルみたいな？」

「良くわからないですけど、進化は進化です。貴方達の、ああいや。能力というものは進化するのですよ。適正進化と飛躍進化、と私は定義していますが」

ふうん、と興味なさそうに少女は唸る。携帯電話を綴じた音が聞こえた。どうにも声色以上に興味があるらしい。自分に関係することとならなおさらだろうか。

「適正進化というのは使いこむことによってその使い道にあった方向に進むというモノですね。穂村彰久の『燃える空気』ダブル・スタンダードなんかは顯著でしょうか」

「あー、そっぴゃあ昔は炎なんて出せなかったよねえ」

そう、接触した当時の彼はそんな器用な芸当はできなかった。彼の存在が今の私の行動を後押ししたと言ってもいいかもしれない。

「そして、飛躍進化ですが。これは出来るが増える、と言いましょうか。必要に迫られたときに一段階上に能力が至るとでもいいましょうか。私の知るなかでこれが起こったのは時間時計ときまどけいの『時計仕掛けの法則』クロック・メカニズムですかね」

あの能力は素晴らしいの一言に尽きるだろう。時を止める、時を加速させる、そして時を巻き戻す。この三つを認識能力の低い能力者には気づかせずに行使できる。正しく最高の能力ではないだろうか。

「それで、それとこれとどういう関係があるのさ」

「せっかちですねエ。多くの能力は相手を殺すための力でしょう？いえ、そうでなくても進化というのは死へと抗うと言っことなのです。故に殺し合いを続けられる環境を作ろう、そういう感覚ですかね」

まあ、厳密には違うのだが。それを彼女が知る必要はないだろう。聞かれれば答えてくれる人間ばかりではないのだ、自分は人間ではないが。

「守人さんはいつも通りでいいですよ」

「はふ、言われなくてもそうするさ。ダルイしさあ」

欠伸を一つして、盾柄^{たてつかもりびと}守人は不満そうに笑う

「つまんなーいなー」

第二話：エンカウント01（後書き）

○ 月蝕 つきはみ 未明 みめい

『非能力者』

次期当主

○ ルーティア・キニー

『???』

能力開発機構研究員

○ 盾柄 たてつか 守人 もりひと

『???』

能力開発機構所属、ルーティアと懇意の能力者

○ 時間 ときま 時計 とけい

クロックワーク・メカニズム

『時計仕掛けの法則』：時間操作能力

詳細不明

第二話 02

公園のベンチに腰掛けて、缶コーヒーを傾けた。地元では見ないパッケージの妙に甘ったるいコーヒーは、少し口に合わなかった。

「く、はあ……」

ここ数日で人生が二転三転したような気がする、実際にその位変わったのだろうが、なんとなく自分のことのようにで他人事のような不思議な感覚だ。

「ホント、どうしようかな」

携帯電話のアドレス帳を眺める、知らない相手のアドレスや電話番号が何件も入力されている。その中には穂村や甘月、先ほど出会ったばかりのルーティアのものも含まれている。

「連絡、取ってみるか？　そもそもどうするのがいいんだろうなあ」

これが問題だ。身の振り方を本気で考えねばならない。将来の夢も無かった自分にとってはこういう選択は困りものだ。甘月は好き勝手にやるのが能力者だとか言っていたし、穂村に至っては死な安などと訳の分からないことを言っていたが。

「適当に一人、かけてみるか？　話くらい聞けるかも知れないけど

……」

一応はプロフィールまでしっかり書きこまれている。ところどころ日本語がおかしいのは彼が打ち込んだからだろうか。それにして

も、仲間と連絡を取ってくると言っただけ、ずいぶん長く帰ってこないな。

「よお、少年。隣いいかい？」

そう声をかけてきたのは、穂村と良く似た空気を纏った男だった。年齢は祝詞より少し上くらいだろうか。まあこの年頃は一つ二つにさ程の違いは無いのだけれど。

「はあ、どうぞ」

そこら中あいていいると言えはあいていいるのだけれど、この時間の公園には人っ子一人いないのだし。けれど別段断るほどの事でもなし、曖昧に了承しておく。

「どうも、つとな」

ベンチに深く彼は腰をおろした。なれなれしい割に妙な壁を感じる、そんな雰囲気の中だった。彼は禁煙パイプを咥え、こちらに目を向けた。

「どんなもんかと見に来て見たわけだが、まーあのクソ女はこうしろつったわけだろうが、全く以て無駄足だな」

「は？」

何を言っているんだ？ その考えが浮かんだとたん、言いようのない違和感、恐怖に体が反応した。

「あ、流石に反応できるか。ふむふむ」

ベンチが歪んで拉げていた。見事なまでの異常。ああ、そうだった。公園に人が全くないなんて、こんな良い天気で、そんなはず流石に無いって言うのに。

「能力開発機構の不破雷堂^{ふわらいどう}、実験を開始する」

右手をこちらに突き出して、彼は不遜に、獰猛に嗤った。

「でさー、良いの？」

「あにがだよ」

口元についたジャンクフードのソースを乱暴に指で拭いとると、穂村は不機嫌そうに甘月の方を向き直った。普段から鋭い、言ってしまうえば目つきの悪い瞳が細められた。

「祝詞クン、どーせ変なのに引っかけられるよ、あたしのカンは良くなるんだ」

「そうになったときはそうなたって話だろ。それだけのことだし、仲間でも何でもねエだろ、今はまだ。つつうか、荷物だの邪魔だのさんざ言ってた割には気にかけるじゃねエの」

包み紙を丸めてその場に投げ捨てた。それは空中で燃え上がり一瞬にして灰になり、風に流される。

「焼きもち？ かーいーなー」

「イッペン干からびとくか？ 死の恍惚ってなあヤミツキになるらしいぜ？」

「それはあれだよ、アタシじゃなくて他の奴に頼むかな。どっちかつてーとSなもんで」

知らんがな、と穂村が呆れたように呟く。目的の仲間が待つている場所まではもう少しかかりそうだ。

「ああ、そこのお二人さん。こんな良い天気にならうデイトかい？」

ニヤニヤと笑うスーツの少女が二人を呼びとめた。

「答えはいらないさ、どうせどちらでも同じことなんだから」

つい、と少女は指揮者のように指を滑らせる。

「良くもまあ、アタシらの前に出てきたもんで。今は荷物も無いんだ、まさかこんな自信家が生き残ってたとは思わなかったね」

「ふふん、貴方こそ大した自信で。相手を知りもしないで妄言を吐く。運だけは良いようで」

「甘月、囲まれてるぞ、こりゃ」

熱源が辺りを囲んでいる、と穂村が告げる。馬鹿な、と一蹴した気持ちもあったが、少なくとも彼の探知能力はこの手のことに関

しては一枚上手だ。

「は？ 何も感じなかったんだけどな。敵意も悪意も殺意も、だよ」

まあ、ただの人間程度のスペックならどうとでもなる。それに敵対する相手に気遣いなど不要だろう。ならば脅威は結局目の前だけだ。

「木偶揃えて悦に浸ってるってえだけなら良いんだろうけどな」

「それは直ぐに解る事さ、さあて、お仕事お仕事」

大袈裟な動作で手を振りかざし、小馬鹿にするかのように嗤った。

「教育してあげるさ、名乗りを上げるのが決まりだからこう言おう。
能力開発機構の枢七種^{ひつぎなたね}、実験を開始するよ」

第二話 02（後書き）

○社 祝詞

プリフィクス・エンチャンター

『名付け親』：？？？

接敵

○穂村 彰久

ダブル・スタンダード

『燃える空気』：？？？

接敵

○甘月 明恵

パワー・バッテリー

『雷帝』：電気を扱う能力

接敵

○不破 雷堂

『？？？』

能力開発機構所属、実験開始

○枢 七種

『？？？』

能力開発機構所属、実験開始

第二話 03

彼が腕を振ると、勢いよくモノが吹き飛ぶ。不破はどうにも遊んでいるように見えた。不可視の攻撃でやろうと思えば即座に殺す事が出来るはずなのにそうしない。最初に言っていた実験と何か関係があるのだろうか。

「ほおらよオツ！ どうしたあ？ お前の力見せてみるっての！」

右腕を振りかざす、それと同時に遊具が何かで叩きつぶされたかのようにひしゃげた。逃げ回って穂村達と合流できないかと考えたが、何故か公園から出ることができない。確かに出入り口へ向かったと思っても、柵を越えても気がつくとも最初のベンチの側に立っている。

「どうなってるんだよ、ホントに！」

集中して不破を見る。自分の能力がああ夢が関係しているとするなら、文字に関係する能力だろうか。ふと、気がつく。

「抗えよ！ つつーか逃がすと思ってんのかよ、実験だつつてんだろ！」

文字が飛んでいる。そこら中に文字があふれている。例えば木だとか、ブランコだとか、壁だとか。これが能力だと言うのだろうか。そして、飛んでいる文字は、壁？

「なにを飛ばしているのかと思ったら、壁、か？ 良くわからないけど、さ」

「……はあん、面白いな、面白いねエ！　そんでもって気に入わねエよそのドヤ顔がよオツ！」

やはり、そうか。なにがそうなのかは解らないが、彼が腕を振り回すたびにその手に押し出されるように壁が飛んでいる。そして彼を取り囲むように壁が存在している。どうもそれを腕で弾き飛ばして使っているようだ。

「とはいえ、決定打が無いのは事実か」

見えるようになったおかげで避けることだけは容易になった。腕で弾き飛ばしているだけなので直線的な攻撃にしかなくていない。発生と向きが解っていて避けられないような攻撃でもない。

「ま、それもこれも人外じみてるけど」

「ぶつくさ独り言って、友達いないのかよ、アア！？」

自分のスペックが異常なまでに強化されているのに、やっと気がついて自覚した。ああこれは、なるほど化け物だ。

「ほんと、参るね……」

馬鹿の一つ覚えのように飛ばされる壁。避けることはできるが近づくことは難しく、そして即座に補填されるせいで近づいたとしても突破できるか解らない。試してみるしかないと言えそうだ。けれどリスクが大きすぎる。

「避けてばっかりかよ？　そんなでどうこうできるかよ！」

考える、はたしてこの能力は文字を見るだけなのかと。『名付け
ヤンタイ
親』なんていう能力、本当にそれだけか？ もっと、何かあるはず
だ。試してみる価値は、あるな。

「接頭語、だとすると」

ぎゅっ、とそこらに落ちていた石を拾い上げ握りしめる。間違っ
ていなければ、そして言葉を直訳すると『接頭語の魔法使い』って
ところか？

「貫く小石！」

全力で、相手が壁を弾く前に投げつける。

「んなモン通るかよ！」

余裕の表情で、恐らくは自身の展開する壁を信頼しているのだろ
う。祝詞の投げつけた石を止めようとした。だがそれは叶わなかつ
た。まるでガラスが砕けるような高い音色を出して、彼の展開して
いた障壁は砕け散り、小石が彼の横腹に穴をあけた。

「あ、アア！？ なんだこれ！ いったえなアオイ！ なんだよっ！
？」

飛び跳ねるようにして不破は後退し、距離を取った。小石は完全
に障壁ごと体を貫通して地面に突き刺さっている。今までどんな攻
撃も通さなかった障壁の崩壊に理解が追い付かない。

「クソが、相性わりいつてか！？ マジでマジでやってらんねええ

っ！」

バチン、と何かがはじける音がした。どうやらこの公園を取り囲んでいた逃げられないように仕掛けた何かを解除したのだろう。追いつ打ちをかけるか、と考え身構えた瞬間の出来事だった。

「ぐっ、の、やろオ……！」

不破が思い切り吹き飛んだ。立ち上がり体制を整えた所にまた、今度ははつきりと火薬のはぜる音が聞こえた。これは、銃声なのだろうか。

「予想外の、事態だった。後はあのクソアマがどうにかしやがんだろ。つつーかしろ！」

こちらに撃つてくる様子は無いが、安心はできない。相手も引き上げる気なら追い打ちをかけるのも下策だろう。とにかく、これ以上ここに居るのも危険、か。

「続きはまた今度、と言うことかな」

答えを待つほど、祝詞も気が長い方ではない。とにかく、二人と合流する事にしよう。月上とも能力開発機構とも半分敵対したような形だ。腹をくくるしかないだろう。

「まったく、隔離結界が消えたと思ったら、不破雷堂とはね。運が

ない」

未明は溜息を吐き、それでも照準を合わせたまま標的を見つめた。もう一人いたのは能力者なのか、何処に所属しているのかもわからなかったため狙えない。化け物は撃つて殺してから考えれば良いとは思うが、命令は命令だ。端末を操作しても情報が得られない以上、勝機を見出すも何もない。

「……しかし、対物ライフルなんだけどね。この子」

不破雷堂の保有する能力、『^{ブレッシャー}高き壁』は防御に特化した能力だ。壁を弾くことによる遠隔攻撃はあくまで副産物というか、無理矢理な利用方法でしかない。盾を殴り飛ばして無理に攻撃しているだけだ。

「それでも、通らないものは通らない、か」

一発当てれば人間の上半身を赤い霧に変える程度の化け物銃なんだけどなあ、そう呟いて彼女は獲物を諦めて、銃の解体作業に移った。こちらの位置に即座に気づいたりはいしないだろうが、それでも相手を甘く見る気は無い。

「ま、化け物どうし潰しあってくれば、それが最上だけどね」

彼女は端末に送られてきたデータを確認して、薄っぺらな笑いを浮かべた。

第二話 03（後書き）

○社 祝詞

ブリフィクス・エンチャンター

『名付け親』：接頭語を付与する能力
勝利？

○不破 雷堂

プレッシャー

『高き壁』：障壁を張る能力
逃走

○月蝕 未明

『非能力者』

狙撃失敗

第二話 04

「さあて、ワタシの実験につきあってもらうよ」

つい、とさながら指揮者のように彼女は指を滑らせる。それに呼応するように集まった人間が角材を振り回す。統制がとれているように取れていない、そんな歪な動きでしかないが、それでも数の暴力というものは厄介で。

「め、んどくさッ!」

幾ら電気を流しても止まろうとしない、と言うのはおかしい。どうやったって人間の体が電気信号で動いているのだから、無理に強烈な電気を流してやれば身動きが取れなくなる、それ以上に死に至ることだってザラだというのに。

「だったら、本命潰しやあ済む話なんだが、とどかねえか？」

「届く距離なんだけど、肉壁に持つてかれるねー、これは」

恐らくは能力による強化かなにかが掛かっているのだろう。少なくともそれは解る。隣に立つ穂村に視線を投げかけても苦々しく舌打ちをするばかりだった。

「ふふん、どうしたのかな穂村。君はもうちょっと出来の良い作品では無かったかな？」

「減らず口叩けない様にしてやんよ、テメェ」

穂村の能力が広がっていくのを感じる。正直、コイツは誰かと一緒に行動するのに向いていないと思う。もちろん、一緒に居てくれることとか、さんざん助けられたことに何も感じていないわけではないが。こと戦闘に於いては、氣遣いの仕様がいないのだ、コイツは。

「不愉快だねえ、いや本当に」

「俺もだよ、いいからさっさと往ねや！」

取り巻く空気の熱量が一気に上がった。サウナの中に閉じ込められたようで少し息苦しい。『燃える空気』^{ダブル・スタンダード}は熱を操る能力だ。高熱にすることで着火する、と本人から聞いているが、どうにもそうだとは思えない。それなら相手を燃やす事もその気になればできると言うことだ。

「おお、怖い怖い。臆病な私は逃げたくなってしまっうね。けれどもだもつ少し成長具合を調べてほしいと、そういうことだからねエ」

それを意に介さず、喪服の少女は嗤った。細くしなやかな指を滑らせて、人間達を操る。倒れ伏した人間の数はそろそろ2桁に達するだろうか。ただの数合わせかと思っていたが、本当に厄介だ。

「チツ、近づかせちゃあくれねえか」

壁を全て取っ払うしかないか、人払いや隔離空間とは言え、あまり大事にしたいのだけれど。誰ともつながりのない人間などいない。人が一人消えてしまうのはそれだけで色々と面倒なはずなのだが。

「くっ、くはは！ 踊れ踊れってね！」

「ああ、そういうことか」

真っ赤な炎が、肉壁をこっそり薙ぎ払う。肉の焦げた異臭が立ち込め、甘月は思わず顔をしかめた。これはただ焼けた臭いじゃない、それ以上にえげつない臭いがする。

「保存状態ってえのが悪かったな。お前が悪趣味なのかも知れんが」

穂村は古い記憶を掘り返す。枢七種、研究コードは『^{ひとがた}人形師^{コンダクター}』。人形を操る能力だったか。人間の形をしたものを自在に操作する能力。生きた人間は操作できない。なるほど、適当な死体でもかつさらってきたか、それともクローニングで用意したか。

「全く、あれだけの数を運ぶのにどれだけ力ネが掛かるか解らないのかなあ、君は」

「これで2対1だな、それで、お前の能力じゃあどうにもならねエだろ」

「おいおい、手足の一本や二本吹っ飛ばしたくらいで、ちょっと燃やしたくらいで人の形から逸脱するって、そりゃちょっとばかし差別的じゃないかな？」

指が空を滑り、燃え盛る人形がおぼつかない足取りで倒れ込むように飛びかかる。

「だーからさー、2対1だっつてんだろーが！」

ありったけの電力を束ねて、叩きこむ。最大チャージで雷2 / 3

発程度の電力。随分と消費をしたが、それでも十分。

「ちょ、セコ……」

青白い光が柩を襲う。声をあげる間もなく死んだか、それとも避けられたか、防がれたか。アスファルトやその下の土を巻き上げたせいで視界がふさがって良くわからない。

「……やったまいたいな」

そう、穂村が呟くのを聞いてやっと思いやりを覆っていた柩の能力干涉が消えたのを感じ取ることができた。死んでもいいや、と思って撃ったには撃ったが、出来れば情報を吐き出してほしかったが。

「はー、しんど。手数しか脳の無い奴は、嫌だねえ」

「とりあえず、死体だけ処理しとくか。何か持つてるかも知れねエから剥いだ後焼くぞ」

「あいさー」

嗚呼、平穏な日常からどんどん離れていくねー、嫌になるよ、本当に。

「おっと、やられた。ゲームオーバーだ」

「ン？ 何がダイ？ チェックメイトには早いと思うケド」

白のルークをキングの目の前において、眼鏡の神経質そうな少年が問いかける。それに喪服の少女は嬉しそうに笑いながら答えた。

「いやね、ワタシが殺されてしまったんだよ。君との片手間じゃあ流石に操作がうまくいかないねエ」

「アハハ、ボクとのチェスが片手間じゃナイかな？」

「それはないさ、こうやって君と遊ぶのはワタシの数少ない楽しみの一つだからね」

少女、枢七種は屈託ない笑みを浮かべる。彼女の能力、『コンダクター人形師』は確認されている能力の中で最も射程距離が長い能力だ。中継点となる自身が操作する人形さえあれば、単純な命令を込めた人形を操ることができる。

「また会おう、甘月明恵。次はこうはいかないさ」

「フーン、今回は彼らなんだ」

眼鏡の少年は目線を天井に向けて、それから盤上に視線を戻した。

「折角の休みなんだ、一緒に居てくれるんだろう？」

「嗚呼、そうだった。ごめんヨ。ついイラッとしてサ」

「他の女の事を考えるのはいただけないね」

悪戯を仕掛ける子供のように、柊は喉を鳴らして笑う。彼は沸点が低い完璧主義者だから扱いに困る、解り易いだけまだましだけれど。計画の要になり得る彼らを潰してしまうのは拙い。

「ま、所詮暇つぶしだけだね」

第二話 04（後書き）

○穂村 彰久

『ダブル・スタンダード
燃える空気』：熱を操る能力

勝利

○甘月 明恵

『パワー・バッテリー
雷帝』：電気を放出する能力
勝利

○枢 七種

『コンダクター
人形師』：ひとがた
人形を操る能力
遠隔地でチエス中

第三話 悪喰な病蜘蛛 01

「つまり、だ。関西で、我々の…いや違うか。月上のお膝元でこれ以上好き勝手されては困ると言うことだ」

「はあ、それはわかりますが」

なんというか、この人は苦手だ。そう白雪は考えながらも出来るだけ顔に出さぬように努めて、コーヒークップで口元を隠した。目の前に居る人物に自分ごときのポーカークフェイスが通用するはずがないとは思っているけれど。

「解っているつもりでは困る。まあ、過ぎた話か。未だに甘月の小娘を確保できていないのは我らも同じなのだから」

目の前の人物、つきみやのほろ月宮朧は平坦な声で呟いた。苦々しく言ってくれば少しはこつちもそれだけ気が楽になるのだが、こつちも平坦に言われると何処までが本気かわからなくて、怖い。

「それで、その…能力者を連れて来いと？」

机の上に広げられた資料を手にとって問いかける。何件かの行方不明者だとか、ちょっとした事故だとか、それらの死者のデータが書き連ねられたものだ。こういう世界に入って初めて分かったことだが、行方不明者と言うのは存外多いものだ。ニュースで三日前から行方が分からなくなっていた人が死体で見つかった、などと言われていたのを思い出せばわかるだろうが。

「いや、今回は始末してもらって構わない。勿論、連れてくること

ができるならそれでいいがね。結果は変わらん。やり過ぎだよ、これは」

データの上でしかないから何とも言えないが、これらの死体にはある共通点がある。いや、この場合はあるらしいだとか、あったらしいと言うのが妥当なのか。とにかく、死体の一部が欠損していると言っ共通点がみられるのだ。

「これを僕だけでやれ、と？」

「協力を取り付けられるなら、お前個人の裁量でやればいい。悪いが月宮は手を貸せんのでな」

事故、であるなら死体の欠損程度はあつておかしくは無い。問題は行方不明だったものが死体で見つかったケースだ。体の一部、あるいは全域に至る食いちぎられたような、挟まれたような欠損。それが全ての死体で見受けられる。死体が放置されていたのも、見つかったのも住宅街だったり森林だったり、廃ビルから路地裏と共通点が見られない。と、するなら単なる偶然と考える方が無難なのだろう。

「……そうですか」

「確かに伝えたぞ。自分も別件でな。追加の資料が要るならば新月か月詠を当たれ。話は通しておいてやる」

隴はそれだけ告げると胸元から取り出した転移符を使って、姿を消した。とたんに周りの空気が軽くなったような錯覚が体を包む。むしろ今までが重かったか。

月上一族の実戦部隊、月宮。その最強戦力と名高い彼が態々、末端

の使い捨ての所まで来るなんて、余程人手が足りないのか。

「しかし、相手が解らないのに僕一人か」

とにかく、やれと言われたらやらなくちゃいけない。居場所を守るためには、そうするしかないのは解っている。けれど、慎重になり過ぎることは無いと思う。彼の口ぶりから言うと、これの犯人が解っているのか解らないのか判断が先ずつかない。個人の犯行とアタリを付けているのかと思って少し前に出てみたが空振りで終わってしまったし。

「さて、協力は欲しいよね。相手の数が解らない以上は」

ポケットから携帯電話を取り出して、アドレス帳を見る。氷室さんは別件で出ていたはずだし、河原ちゃんかわらと真冬ちゃんまふゆはだからと言って前衛向きじゃない。真冬ちゃんは一匹狼な所があるから協力してくれないだろうし。一切は正直、この犯人より下手すると危険となると

「白百合音色しろゆいしき、か。どんな人かわからないからあんまり頼りたくないけど、仕方ないね」

話によれば、能力開発機構出身らしいし。良くわからないが一切ひとごとみたいなイカレたやつじゃなきゃそれでいいんだけど。

「案ずるよりなんとか、だね」

メールで、と言うのも考えたが、出来るだけ早く返事もほしいし電話で連絡を取ることにする。コール音が二桁を数えようとした辺りで、反応があった。

「はいー、白百合ですよー」

「あ、千染白雪です。今大丈夫かな？」

電話の向こうで何か話声が聞こえて、そしてふすまを開けて締め
る音が聞こえた。暫く待っていると間延びした声に戻ってきた。

「はい、どうぞー」

「今、月上からなにか仕事来てないよね。良かったら一緒に手伝っ
てほしいんだけど」

「それは、デートのお誘いですかー？」

なんというか、からかっているのだろうか。声色からはそうは思
えないのだけれど。だとしたら、なんだろう、天然なのだろうか。
そんな生き物が現実に居るなんて俄かに信じられないけれど、それ
を言うとブーメランで自分たちに帰ってくるか。こっちの方がよっ
ぽどファンタジーやメルヒェンじゃないか。

「いや、お仕事の誘いだけど。今、何処に居るの？」

「今ですかー？ 今ですねー、えーっと…、真冬さんとお話してた
ですよー」

「だから、何処に居るの？ 月上のお屋敷？」

「あ、はいー。赫夜さんのお宅ですねー」

あの真冬ちゃんとお話しね。彼女は強くなることに固執していて変にストイック過ぎて余裕がない感じだからそんな暇あったら鍛錬に精をだすタイプだと思ったけど、意外だなあ。

「で、手伝ってくれるかな。それだったら今からそっち向かうから準備しておいてほしいんだけど」

「デートのお誘いですか？ 照れちゃいますねー」

「ああ、もう、それでいいから！ 準備しといてね、明日の朝には着くようにするから」

強引に告げて通話を切る。なんというか、一番疲れるタイプな気がする。相手の都合を聞かなかつたし、こっちから何も言わなかつたけれど。ダメだったらダメで諦めてデータを直接受け取って河原ちゃんに協力してもらった方がいいだろう。

「はあ、なんか毎回、貧乏くじ引かされてる気がする……」

第三話 悪喰な病蜘蛛 01（後書き）

○千染 白雪

ジャスト・グッド・スピード

『時間停滞』：速度を操る能力
行動開始、そして困惑

○白百合 音色

『???』

人の話を聞かない

○月宮 朧

『???』

使いつぱしり

第三話 02

立派な造りの門をくぐり抜ける。何時もここに戻ってくるときは、嫌な気分になる。門番のように傍らに立っている人間の目が気になつて仕方ない。敵意と、なにか醜いものでも視るような視線。

「やってらんないよ、本当に」

彼らが陰陽師の一族で、自分が人外だから仕方ないのかもしれないけれど。それでも割り切れるものでもない。まだ、人間をやめたつもりも無いし。

「あ、おかえり。早かったね」

突然声をかけられて肩が跳ねる。

「真冬ちゃんか、本家で逢うなんて珍しいね」

まだまだ夏は遠いけれど、もう決して寒さとは縁遠くなつたにも関わらず防寒着を着こんだ少女は、少しだけ笑みを浮かべた。

「新入りの世話させられてたのさ。オマエが来てくれて助かったよ」

マフラーの少女、霜月真冬しもつき まふゆが持つ空気は異様に冷たい。能力の弊害というか、常に能力が漏れてしまっている状態にあるらし。だから彼女の周りはいつも震えるほど寒い。

「ああ、ちょっと無理矢理気味だったけど、真冬ちゃんの役に立っただけならうれしいよ」

さて、少し彼女に白百合音色の事を聞いてみようか迷う。彼女は人を見る目はあると思うけれど、あまり誰かと話す事を好まない、と言うよりも何かに時間を割くことを嫌がる傾向がある。さきに話しかけてくれた分は望みがあるとは思うけれど。

「あ、そうだ。なんか仕事押し付けられたんだってね。あたしも行つていいかい？」

「へっ？」

「なんで意外そうな顔するのさ、実戦の方が鍛錬積むよりいいだろ」

つい、声を出してしまったけれど本当に意外だ。確かに、実戦経験の方が能力者の進化や能力の発展に結びつきやすいと言うのは解っている。身の危険が成長を促進するのではないかと、そんな風に言われている。けれど彼女が誰かといこうとすることは無かった。何時も一人で行きたがっていたように思う。だから、普通なら自分が行くから来なくていい、くらいに言うはずなのだが。

「そりゃまあ、そうだけど」

「新入りも動かしたいみたいだしね、赫夜だっけ、あのヒトは。アレのサポート一人で行るのも大変だし、連れてってやる」

まあ、手を貸してくれるならありがたいけれど、連携をとれるか不安もある。けれど単純に戦力として数えられるだけ、なんの能力者かよくわからない相手よりまし。

「あ、おまたせしましたー！」

薄着の少女が縁側から飛び降りてきた。能力者には珍しい、やわらかな空気をまとっている。能力者、という生き物は常に能力によって干渉している。真冬ちゃんは別らしいけれど、河原ちゃんや一切も人間性ではなく能力による雰囲気^{きり}を醸し出している。

「君が白百合音色、だよ。僕は千染白雪。改めてよろしく」

「そんなことよりさあ、追加資料受け取ってこいよ。その間に資料見とくからよこせ」

「紙のほうは捨ててきちゃったよ、持ってられないもの。これで見といて」

ポケットからUSBをとりだして投げ渡す。紙媒体の資料はかさばって仕方がない。彼らはそれを好むけれど。そのあたりが旧時代的というか、陰陽師らしいというか。とかく、そういったデータを取り込んでおいたものがそれだ。

「ここ、パソコンとかって新月のところしかないんだけど…」

「今から行くんだから借りればいいんじゃないかな。音色ちゃんも」

真冬ちゃん是不愉快そうに顔を歪めたけれど、溜息を吐いて屋敷の中に入って行った。

「ほら、出てきてそうそう悪いけど、行くよ」

場所を知っているか知らないか、そこまでは知らないのだけれど、ついてきてもらえば問題は無い。言葉でだけついてくるように促し

て、屋敷の中に踏み入れる。何処に居たって不愉快な視線からは逃げられないけれど、外に立っている月宮の連中の方が露骨で鋭い。

「泣きたくなるね、全く」

「ん？ えーっと、なでなでします？」

「いや、しなくていいから」

なんでそんな発想になるんだ。鶯床だか鶯板だか、とにかくそんな名前の板敷きの床を進む。いちいち音がやかましいと思うのだけれど。

「新月さん、入りますよ」

どうせ、真冬ちゃんが先に入っているのだから返事を待たずに入室する。とたん、熱気が押し寄せるように吹き付けた。彼女のまき散らす冷気をもともしない、というのはなかなか強烈なものだと思う。

「あいよー、ちゃんと聞いているからね、ちょっと待っててねえ」

そんな部屋に迎え入れてくれたのは殆ど下着姿に近い女性。彼女がこの部屋の主、新月朔夜^{にいづなくや}である。新月家の若いエース、というか新世代というのか、とにかくそういった人物らしい。情報統制を生業とする新月家で珍しく式紙や術だけではなく情報機器を扱う人物。

「にしてもさー、真冬ちゃんこの部屋に住んでくんないかなあ。この部屋エアコンもないんだよね、ありえねー」

古い日本家屋というか、伝統ある建築物である月上本家には電気水道ガスのライフラインはあれど、なんというか設置されているモノが中途半端だ。殆どを符やら式で代用してしまえると言うのが理由らしいが。

「えーっと、プリントアウトしちゃうか。ちよいとまってね」

カチャカチャとキーボードを叩く音とマウスをいじる音が聞こえる。どう見てもゲームをつい今までやっていたように見えるのは気のせいだと言うことにしておこう。

「えーっと、これが死体が見つかったマップだね。恐らく同一の犯行ってー思われてる奴。円で囲ってあるのは運んだ形跡がみられるものだね」

「これってこの県だけなんですかー？」

「そ、犯行がこの県に集中してるってことは此処が拠点なんだろうね。それで、此処には今まで機構の手が伸びたことは無い。てーか、関西には手を出してこなかったから今の今まで野放しになっちゃったんだよねえ」

特にここ最近の能力者の発生は異常だ。一つ潰せばまたひとつと言ったペースで発現し、災害のようにその力をまき散らす。だからこそ、こういった静かに覚醒してしまったタイプが余計な真似をしてくれるのだろう。

「能力者ってのは確定、みたいですね。この地図を見る限り結構活動場所は搾れそうですが」

「うん？」

「いや、死体のパターンをみるに隠されてる件とそのまま放置してる件、結構な共通点ありません？」

机の上においてあった煙草を咥え、朔夜は火を付けた。鬱陶しそうに額の汗を手の甲で拭って、ワザとらしく笑う。

「ふむふむ、続けて？」

「今でも活動してるこういう世界の人間は月上だけじゃないってことですよ」

河原ちゃんから話を聞いておいてよかった。彼女もそういった界限の人間だった。そもそもが月上が気がつけたのはその業界の人間に能力者が発生したからにすぎない。

「ふうん、ま、良いんじゃないかな？ 君たちも良くやってくれるしね。」

恐らくは、いや確実に。確実に月上は今回の件を完全に把握している。なのに何故か中途半端にしか情報を与えない。何か妙なものを感じる。

「まあ、あとは現地入りしてみるしかないね。これ以上は望めないんですよ」

「あれー、もう見終わっただんですかー？ 私まだなんですけどー？」

「途中で教えるから、ほら、白雪も行くよ」

忘れてはいけない、僕は月上にとって倒すべき敵であることを。僕は所詮人外に過ぎないことを。こういうとき、もう少しだけ、何も考えずにいられたらどんなに楽かと、そう思う。

第三話 02（後書き）

○千染 白雪

ジャスト・グッド・スピード

『時間停滞』：速度を操る能力

○霜月 真冬

『???』

○新月 朔夜

『×』

○白百合音色

『???』

第三話 03

なんというか、首のあたりがチリチリする。歩きながら何度も振り返るけれどこちらをうかがっているような人はいないみたいだ。それでも、なんというかこちらを見ている気配がするのだけれど。

「ん？ どうしたよ」

「いえ、何でも」

あの後、なんとか穂村と合流することができた。甘月は後始末をしている、と言っていたが何かあったのだろうか。まあそんなことはどうでもいい。重要なのは能力開発機構と実際に事を構えてしまったこと、だろうか。向こうから仕掛けてきたにしろ、何の思惑があったにしろ。一度敵対したことには間違いは無い。

「甘月は、ふん……ついでに仲間に一回接触するってよ。ま、そういうことなら俺は行かなくていいか」

携帯電話を閉じて不満げに鼻を鳴らす。

「あんまりキヨロキヨロすんなよ、素人くっせえからよ」

「……そうします」

やけに刺々しい雰囲気、穂村は不満げに一瞬こちらに視線を向けた。窺うような、こちらの中身を覗きこむような視線だと感じた。

「ま、これからどうするつもりか知らんが、今からどうする？」

「同じじゃないですか、それ」

「ちげえ、とは思うがな。結局のところ俺は向かってくる相手しか相手にする気はねえんだわ」

煙草に火をつけて、彼は吐き出すような、絞り出すような調子でそう語る。視線は迷っているかのように辺りを飛び回っている。

「俺もさ、甘月も色々あつて身内意識だけはあるわけだ。罪悪感とか、そういうのはあんまりねえ」

「あんまり、ですか」

「あんまり、だ。そりゃあお前、悪いなアとか申し訳ねえなあくら
いは思うさ」

思うだけなら自由つつーか、タダだろ。と含むように呟き、煙を吐き出した。その後盛大にむせ返り、不機嫌そうにまた煙草を啜える。

「身内意識だけはあるから、まあ身内は守つとこうとか、うまくやっていこうとかそういう考えはある。つつか、そういう考えがないと多分、ダメになつてゐる」

なんとなく、理解できるような気がする。そういう人間らしさを無理にでも演出しないと、この身の内にある名づけようのない何か、燻ぶる感情で頭がどうにかなりそうになる。

「うん、まあ言いたいのは、だ。お前が身内になる気があるのかな」

いのか、ハッキリしたいんだわ。アイツも、甘月もあんなだけお前に気イ使ってる所あるしな」

彼女の人間性は知らないが、あれで気にかけてくれていたんだろうか。大抵寝ていたか穂村の話を聞いていたかだった気がする。

「アレでそうなんだよ。だからタチが悪いんだけどな」

怪訝そうな顔でもしていたのか、こちらを見た穂村は疲れたような笑みを浮かべた。

「ま、アレだよ。あんまし長くいるとよ、お互い情の一つも沸きそうになるわけよ。同じ身の上になっちまうわけだし」

頭を気を紛らわすように掻いて、穂村は視線を明後日の方向へ向けた。言いにくそうに、気恥ずかしそうに、けれど明確に告げた。

「敵対するか、しないか。選べよ、今すぐにな」

気だるげな視線が射抜く。何か言葉を吐き出そうとしても喉の奥で引っかかったようで、出て来はしなかった。

「そ、そんなこと、そんなことは……」

「わかりやしないさ、わかりやしないがね、それでも問わずにはいられないのさ」

ポケットで携帯電話が歌を奏でた。最近はやりの、少し前にテレビに出ていた少女の歌だ。穏やかで、流れるような、他の歌い手とは一風変わった涼しげな声が特徴の。

「出るよ」

「あ、はい。スミマセン」

着信表示の画面に、知らない名前が表示されている。鬼灯命^{ほおずきまこと}、でいいのだろうか。この電話の用途を考えると一概に間違い電話とは言えないだろう。

「はい、社ですが」

「おいお前、今どこに居る？」

「は？」

電話の向こうから聞こえてきたのは相当に唐突な台詞だった。前置きも社交辞令も無い、待ち合わせしている友人にでもかけているような言葉だ。

「今、駅前だ。最近、ここいらで色々起きてるのは知っているだろう。あー、大まかな場所はGPSで解ってる、だから急げ」

それだけ早口に言うと言電話を切られてしまった。これはどうするのが正解なのだろうか、アドレス登録を確認すると、彼女はどうか無所属の能力者らしい。無所属、というなら接触する価値はあるか。

「どうした？ 妙な顔になってんぞ」

さて、どうしたものか。

第三話 03（後書き）

○社 祝詞

ブリフィクス・エンチャンター

『名付け親』：意味を与える能力

○穂村 彰久

ダブル・スタンダード

『燃える空気』：熱を操る能力

○鬼灯 命

『???』

第三話 04

「さあつてと、これで会いに来てくれるか、だなあ」

恋人を待つ少女のように、彼女は微笑んで携帯電話を閉じた。頬にべつとりと付いた生温かい血液をぬぐって、足元の人間に声をかける。

「ま、来なかったら首掴んで連れてくただけだけど。んでえ、誰の指示だ？」

むせるように血を吐き出して、弱々しく視線をこちらに向けた足元の人間を、彼女は明らかに苛立った様子で蹴り飛ばした。

「おい、聞こえたか？ 日本語解るか？ 理解できてるか？ 立場とか」

小柄な敵対者の体は面白いように跳ねて、壁に叩きつけられた。肺から空気の漏れる音と、反射的にこぼれた微かな声だけがまだ生きていることを主張する。

「だ、から。そう、いーの、じゃ、ない、て」

手について何とか立ち上がろうとする女の手を踏みつけて、躍る骨の碎ける何とも言えない感覚が足に伝わってくる。鬼灯命はちまきは薄らと笑みを浮かべた。

「それが本当だとしても、納得できないわけだ。こう、納得できる理由がほしいわけで、ホントウのこと言ってほしいわけじゃないわ

けだよ。なあ？」

踏み碎かれた手を抱えて丸くなり、呻いている女に声をかける。どうにも加減が難しい能力で困る。鬼灯はうつとうしそくに溜息を吐いた。

「あんまさあ、時間とりたくないんだけど」

何も答えようとしない相手に、頭が痛くなる。どうしても手加減だとかがうまくいかないのが自分の能力の欠点だ。何をやるにしても一定のラインの結果しか出せないのも困りものだ。

「ふーん、身分証あるのか、少なくとも月上じゃないな。久多良木くたらぎ多々良ただら、すげえ名前だな？ 本名かこれ」

身分証を持っているのは野良能力者が能力開発機構に所属している連中のどちらかだ。機構の能力者は研究の検体で管理されている為、IDカードを持っている。大して月上では書類上存在しない扱いにしている為、そういったものは完全に処分される。しかし、保険証を持っていると言うことは、いままで接触を受けなかった野良能力者の線が濃厚、とはいえこれが本人のものかどうかまでは解らないが。

「何とか言えよ、おい」

血の気のなくなった真つ青な顔がこちらを向く。焦点のあっていない目は不気味に感じて仕方がない。随分と血を抜いてやったから仕方のないことかもしれないが。

「そ、だよ。私の、な、まえ」

絞り出すような声が不快だったので、もう一発蹴りをくれてやる。空っぽになった胃の内容物が逆流し、床にぶちまけられる。胃液とというのは相当に生産が早いらしい。この短い時間で確か、5回目くらいだろうか？

「能力の干渉が続いてる割にはなーんも起こらないんだな。気持ち悪…」

この女が能力者だと気がついたのがそれだった。この窺うような、探るような気持ちの悪い感覚。この辺りについてからずっと感じていた干渉領域。この感覚はかなり広域をカバーしているはずだ。にもかかわらずこの女は目の前に現れた。

「なんでわざわざザコの癖に出てきたか。これが解らないんだよなあ、うん」

答えは帰ってこない。こちらが相手を視界にとらえた瞬間、こいつは逃げ出した。突然走って逃げたわけではなく、さりげなく視界から外れようとした。能力干渉をおこなったままそんな小細工で見逃すはずもない。そんな舐め腐った態度が気に入らなかったのが、いまの鬼灯を駆り立てる一番の理由だと言える。

「こ、えー、から、よ」

途切れ途切れに、女は喋る。正直なところ聞き取りづらいと言うレベルではないが。集中してやれば何を言わんとしているかはなんとか解る。広い干渉域とこの弱さ、保有している空気から察するに、どうも探知か探查系統の能力なのだろう。こういう系統の能力者は何度か見たことがある。

「はぁん、ま、運がなかったんだな」

他の人間ならともかく、今までがどうだったかはともかく、鬼灯は他の能力者に良い感情はない。少なくとも、友好的ではない相手に良い感情を持つ必要がないと考えている。それだけ、彼女にとつての社祝詞は別格だといえるのだが。

「さ、い、あく、だ」

多々良の干渉領域が新しい能力者をとらえた。こちらに近づいてくる、のだろうか。探しているような、そんな雰囲気ですぐ向かっている訳ではない。仲間ではないだろうが、自分にとって有利には働かないだろう。所詮、自分は何処にも所属していないはぐれ者で、しかも能力は下の下といったレベルでしかない。『バーソナル・スペース』は単純に感知能力を強化しただけの何の役にも立たない能力だ。意識

「つつ、ほ、んと、な、んで、こーな、るんだ、ろ」

世界が回っているようで、急に冷えたようで、気持ちが悪い。血が足りない、めまいがする、全身が痛いし、吐き気もする。

「ああ、くそ、だ、めかぁ……」

起き上がるだけの気力もわからない。痛みが遠のく、瞼が重い。ねっとりとした眠気のような気持ちの悪い感覚が広がる。

「しにたく、な、い、なあ……」

心の底からそう思ったけれど、どうにも瞼の重みには耐えられない

か
っ
た。
。

第三話 04 (後書き)

○ 鬼灯 命

『 ??? 』

○ 久多良木 多々良

『 パーソナル・スペース
縄張り意識 』 : 感知する能力

第三話 05

視られている。正直なところ今までだったとすれば、以前の自分なら、あるいは何も知らない誰かなら、きつと気のせいや或る種の病気を疑われるだろう。けれど、今の自分にはそれを裏付けるだけの確信に近い何かがある。

「駅前って、ここでいいのかな」

それほどにぎわっている町ではないが、それにしただって人通りが少ないような印象を受ける。此処についたときはもう少しにぎわっていた気がするのだが。自然に、人の波が消えていくような、そんな感覚だ。ゆっくりと画面がフェードアウトしていくように。

「や、久しぶり」

ひよい、と手をあげて少女が嗤う。何時の間に近づいたのかわからなかった。柔らかな笑みを顔に張り付けて、彼女は手を差し出した。

「鬼灯命ほおずきみこと、さ。会いたかったよ」

自分と彼女は初対面のはずだ。少なくとも記憶の中に彼女の姿はない。覚えていないだけと言う可能性はあるが。

「……初対面のはずだけど？」

「ああ、こうして会うのは初めてだね。けれど、ずっと私は君を感じていたよ」

早速後悔しそうだ。彼女が視線の正体なのか、とも考えたがまだ纏わりつくような視線は感じたままだ。恐らくは違ふのだろう。

「社祝詞、一応はよろしく。で、何か用だったの？」

「まあ、ね。この町は今ちょっと色々あるんだよ。本当に色々だね」

鬼灯命、穂村が言うには協力者寄りらしい。彼女から連絡があったことを話すと彼は色々と教えてくれた。だが気になるのはそんな事よりも、あそこまでどうするのか決めさせようとした事が無かったことのように扱われたことだ。

「ま、気にしても仕方ないか」

「うん？」

「何でもない、続けて」

彼女は近くの手すり、とでもいうのかガードと言えばいいのか、とにかくそこに腰かけた。こちらを窺うように一度見つめて、直ぐに目をそらした。

「君を呼んだのはそう、協力してほしかったからというのが一つ。もうひとつは、まあこれは後の話かな」

「協力？」

「そ、君も感じていると思うけど、ここはある能力者が縄張りにし

ているんだよ」

この視線の主がその能力者、なのだろうか。

「ま、私にも事情つてのがあるわけなんだよ。穂村から聞いたかもしれないけどね。彼らと一緒に動かないのもこの辺りの事情があるんだけど、ま、そんなことはたいした問題じゃない」

鬼灯、というのは穂村が言うにはこの辺りを治めていた一族の分派に当たらしい。勿論それは、歴史的な、表立ったものではない。良くあるオカルト的な、創作に良くあるような裏側で治めていた一族、だと言う。

「まあ、いうなれば縄張り争いに近いものがあるんだ、うん」

腕を組んで、彼女は自分の言葉にうなずいた。一々、身ぶり手ぶりが大袈裟という印象を抱いた。

「ここいらでけっこう頻繁に行方不明とか、死人とかが出てるんだよ。これは困る」

「それはどうして？」

「うーん、ま、良いか。ここは所謂、霊地と言う奴なんだよ。あんまり気にされたことも無いんだけど町のつくりから何からきっちり考えられていたワケだ」

「過去形、ね」

駅前ありがちなことに、ちょっとした町の地図が掲示板に張ら

れている。専門的な知識も何もない祝詞には正直なところその言葉の意味は理解しかねた。そもそもが霊地だのなんだのという発想自体が眉唾だと思っていたのだが。

「ま、良くある話だろ？ 都市開発、そして近代化の波にオカルトは勝てなかったという話さ。勿論、今でもオカルトはアングラな方向、いわば地下ですーっと生き延びてきたわけだけどね」

「それはまた、事実は小説よりと言う奴で」

「ま、ね。それでも絶対数は減ってるのは確かさ。怪異を生むのは人の心そのものなんだから」

にやり、と嗤って彼女は空を掴む動作をした。そして何かを強く握りこんでから、手を開いた。クシャクシャに丸められた紙切れが、その上に転がっている。

「式紙と言う奴だね。隠密性の高い上等な奴だ。これが町中にばら撒かれてる。プライバシーもクソも無い状況ってトコ」

それを無造作に彼女は捨てた。拾いあげて伸ばしてみると、良くわからない文字のようなものが書かれているだけで、特に何かありそうには見えない。

「で、ここで話を戻す。人死に出るのは当然、だけど不用意に出すぎるのは困る。人の死は穢れた。ただでさえ流れを乱された霊地が穢れる。そうすると良くないことが起こる、らしいね」

「なんともあやふやな話で」

「仕方ないさ、鬼灯家というか、オカルトが半ば滅んでどれだけ立ったと思ってる？ もうこういう眉唾話はホントなら無くなってしまう方がいい。しかし、私たちはもうオカルトの住人になってしまった。違うか？」

「かもしれない、ね。それは」

鬼灯は立ち上がり、何枚かの紙切れを差し出した。綺麗に切りそろえられ、何か先ほどの丸められた紙と似たような文字が書かれているそれを、受け取る。

「人払いの符だよ、持っておいて損はない。正直ね、こういうものを用意できる相方が居ないと辛いよ？ だから協力してくれるとありがたいんだが」

少し、考える。以前に襲われた時もそうだし、穂村から言われていたのもそうだが、仕掛けてくるときに月上や開発機構は絶対に人払い等の工作をするのだと言う。この力は秘匿されるべき、と言うのは納得であるし、余計な人の目は避けたい。だが、自分から仕掛ける気が無いなら不要だ。だが、何処にも所属していない能力者は確実に存在するし、選択肢の一つとしては確保したい。

「……」

穂村達は別口で恐らくは用意している、か全く持っていないかのどちらかだろう。彼らを頼る、他の組織を頼る、彼女に協力する。どうするのが正解か、が問題だ。

まず、どちらかの組織、と言うのは難しい。1度形とは言え敵対しているし開発機構なんて名前自体何されるかわからない。月上とも今さら、と言う感じはする。だが関係を修復するなら早い段階、だ

ろう。穂村はどうか、というと甘月の方は信用ならない。なんとい
うか、彼女は危険だとは思えない。

「そうだな、信頼の証に能力を明かしておこう。私の能力は『自動
マチック制御』^{オート}というてね。名前のまま、色々な動きを補助する能力さ」

「…協力、する。正直なところ、それが一番いいような気がする」

差し出した手が悪魔の手なのか、それとも救いの手か。それが解
る時自分はどっしているか、少しだけ楽しみだった。

第三話 05 (後書き)

●社 祝詞
プリフィクス・エンチャンター
『名付け親』

●鬼灯 命
オートマチック
『自動制御』

第三話 06

重い瞼を開く。湿っぽく、埃っぽく、そして黴臭い空気を僅かに吸い込んで、彼は溜息を吐く。細く長く、浅い呼吸を繰り返して彼ゆつくりと身を起こした。ギチギチキチキチと不愉快に体は悲鳴を上げる。

「もう少し、だ」

掠れた声をあげて、寝具から這い出す。幾つか潰された自分の半身のせいで体中が悲鳴をあげている。少し性急に動きすぎた弊害がもう出てしまっている。身内のゴタゴタに乗じた計画も恐らくは此処までが限界だろう。

「……」

それでも、彼にはそうするだけの理由があるように感じられた。そう思い、盲信し、狂信した。自分の中にある時代遅れな感傷と折り合いをつけることも出来ずにいたから、きっとこうなったのだろうと彼は嘲笑い、普段着に袖を通した。

「んー、疲れましたねー」

「大袈裟だなあ、そんなにかかってないと思うけど」

大きく伸びをしてそんな事を言う音色に、彼女よりよほど疲れた調子で白雪は力なく笑いかけた。真冬は社交的と言える性格ではないし、能力の干渉領域のせいでもどうしても近くに居るだけで気疲れする、というのは否定できない。それでも彼女がそういう気疲れをするとは思えないが。

「軟弱な奴、逐一あっちキョロキョロこっちキョロキョロしてるから無駄に疲れるんだ」

君のせいだ、と思っけていても白雪は口を開かない。余計な軋轢は避けるべきだ。特に能力者同士はもしもの時に頼らなければならぬ相手だから。そもそも、真冬が常に能力を発動している状態なせいで余計に気を使わなければならないと言っけるのに。なにせ、能力者に能力者は解るのだから、居場所を宣伝して歩くようなものだ、あれでは。

「僕は憶病だからね、万が一どころか、億に一つだっけて怖いんだよ」

「はん、絡んでくる程度の相手なら丁度いいじゃない」

「僕はあがり症でね、人前で大立ち回りは趣味じゃないんだ」

隔離の為の道具だっけて無限じゃない。支給される分のほかにもストックは多い方がいい。将来のことを考えればこれでも足りないくらいだ。

「ところで、これからどうするんですかー？」

「ああ、そうだった。一応は月上の傘下にある陰陽家を廻る予定だよ。挨拶しておかないと煩いだろっからね」

そもそも、月上の傘下に入ること自体を渋っていたと聞いているし、その上で自分たちのような人外にうろつろされるのは気に食わないだろう。適当な建前を振りかざして敵対されてもたまったものではない。

「連絡は入れてあるから、迎えが来ると思っただけど」

「ええ、もう来ております」

一瞬の出来事だった。辺りの風景が塗り替えられるように変わり、砂利の敷き詰められた庭に気がつけば立ち尽くしていた。確かについ先ほど電車から降りたばかりで、決して人の少ない駅のホームに居たはずなのに。隣を見れば二人とも何が起こったのか解らない様子で、いや、音色は相変わらず何を考えているのか解らない笑顔で顔を浮かべていたが。

「ようこそ、篠原家へ。歓迎いたしますよ？ ささ、どうぞ遠慮なくお上がり下さいな」

転移符、なのだろうか。しかし気配も予兆も無かったが。

「素敵な歓迎だね、それはもう」

「気に入っていただけたようで光栄です」

恐らくは使用人なのだろうその人物は薄く笑みを浮かべて戸を引いた。玄関に回る必要も無いようなので、さつさと縁側で靴を脱いで上がってしまうことにする。こういった胡散臭い手合いにはまともに取り合わないに限る。

「少々お待ちを、当主を呼んで参りますので」

通された一室で記憶を掘り起こす。篠原一族、古くは死原^{しのはら}、あるいは死乃原^{しのはら}とも呼ばれていた。確か、毒の扱いに秀で昔から政争の裏で動いていたと言う。蟲遣いの一族でもあると。

「ふうん」

「どうしたんですかー？」

「いや、ちよつと気になっただけさ」

はっ、と白い息を吐いて真冬は目を閉じた。落ち着いて部屋を見渡してみる。別段変った所はない、月上の屋敷よりは狭いと言えばそうかもしれないが、というよりも町中にこんな屋敷があつて妙に思われないのだろうか。

「待たせた、な」

静かに襖が開き、壮年の男性が部屋に入ってきた。彼が当主、なのだろう。そういった立場特有の雰囲気と言うものを纏っている。

「いえ、突然お邪魔したのは此方ですので」

「お気づかいなくー」

机を挟んで正面に彼は腰かけた。使用人らしい女性が湯気を立てる湯呑と御茶受けを置き、小さく頭を垂れ部屋から出て行った。

「まあ、さつさと本題と行こうか。月上が何用だ？」

「最近はこの町で何やら事件が起こっているのだ」

「ふむ、それならば警察がうまくやるだろうに。今更に我々が手出しする理由も無いだろう？」

彼は唇を茶で湿らせて、此方を窺うような、そんな視線を向けた。その声には怪訝そうな色が見え隠れする。

「そう、お上は思っていないようです。何か掴んでいる、のかもしれない。もしかすると可能性の問題に過ぎないのかもしれないが」

「まあ、異常ではあるな。時期が時期だけに関係ない、と断ずるのは楽観視が過ぎると言うものだろう」

気に食わない、とでもいうような調子で彼は続ける。

「鬼灯の一家が全滅した。知っているか？」

「……鬼灯がか？」

真冬が声をあげる。恐らくは驚いているのだろう、珍しく動揺した、と言うよりも虚を突かれた時の癖が出ている。

「ああ、争ったような跡があるらしい。そして、その跡取り娘は行方不明だ。だがこれは確か、そうだな、3つ目の事件が起こった直後くらいだったはずだ」

無論、無関係であるとは言えないのだろう。言いづらそうな、苦々しい表情をしている。

「どうにもな、不詳の息子がその直前から行方知れずなのだよ」

「ふむふむー、それでー？」

音色は注がれたお茶を飲み干して、あまりにも自然な動作で白雪の前に置かれたお茶に手をかけて口を付けた。そして、一瞬だけ呑気そうな笑みが崩れた。

「ああ、調べるならその辺りから手を付けてみると良いだろう。少なくとも我々が知り得る情報はその位だ。調査の件なら勝手にするがいい、便宜を取り計らうようには言っておく」

その表情の変化にゾツとした。言い知れない恐ろしさと言うか、おぞましさと言うか、なんにせよ自分の感覚に訴えてくる何かがあったのは間違いない。

「話は終わりだな、今日はここで休んでいくといい。ここを拠点にしてもいいが、お前らも良い気はすまい」

第三話 06 (後書き)

○千染 白雪
ジャスト・グッド・スリッド
『時間停滞』

○霜月 真冬
『????』

○白百合 音色
『????』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4806s/>

観測者

2011年10月24日17時09分発行